

群馬県内出土の茶臼について

谷 藤 保 彦・山 下 歳 信・水 谷 貴 之

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. はじめに | 4. 茶臼の製作について |
| 2. 茶臼の略研究史 | 5. 長楽寺永禄日記について |
| 3. 県内出土茶臼の様相 | 6. おわりに |

—— 論文要旨 ——

「臼」の研究は、三輪茂雄氏の一連の研究によって体系化され、近年になって各地域での集成作業が行われつつある一方で、個別臼の論考も目にするようになってきた。群馬県内においても、臼の出土事例の報告は少なくなく、増加の一途をたどっている。

そこで、所謂「臼類」の中でも茶臼に視点をしぼり、基礎資料となる県内出土資料の集成を行ったところ、現在までに図化・報告されている資料として339点の出土が確認された。他県の集成例をみると、神奈川県62点、茨城県21点と、群馬県の出土数量が圧倒的に多いことが知れる。こうした数量の差は、何を意味しているのだろうか。ただ単に、地域的な特徴とだけ言えるのであろうか。また、県内で出土する茶臼のほとんどが、主に安山岩を用いた製品であることも集成の結果知り得た。小島田八日市遺跡では、茶臼の未製品が数例出土していることから、製作にかかわる遺跡と考えられ、製作工程を知る良例といえる。こうした諸要素を考えあわせれば、需要と供給そして流通の問題へと展開していくことが見えてこようが、今後の検討に委ねたい。

一方、これらの年代は、全国的な傾向と矛盾せずに15・16世紀の遺跡からの出土が多く、中には長楽寺遺跡例のように15世紀初頭以前とされる資料も存在する。県内最古の資料である。他方、「長楽寺永禄日記」（永禄八（1565）年）は、当時の僧侶の日常生活をうかがう史料として知られており、この中に茶に関する様子が頻出している。本稿では、この「長楽寺永禄日記」から読みとれる茶のあり方にも触れておく。

キーワード

対象時代 中世
対象地域 群馬県
研究対象 茶臼

1. はじめに

所謂「臼類」の研究には、三輪茂雄氏の研究があげられる。その代表的な論文である『臼』（三輪 1978 a）は、「（前略）すべての臼類を、一連の進化過程においてとらえること、それらと人間の生活文化史とのかわり合いを考えること……」としての臼類試論とし、民俗民具学、考古学等の側面をも持ち合わせた、大系的な臼研究の基礎と言える。また、こうした三輪氏の一連の研究成果（三輪 1978 a/b/1999 他）は、高く評価される。

国内各地での遺跡出土の臼の報告事例が増加する中にあって、近年の臼研究の動向をみると、各地域での集成作業が行われつつある一方で、個別臼の論考も目につく。茨城県では穀物臼・茶臼の集成が行われ（川又 1995）、神奈川県では茶臼のみの集成がなされている（堀田 1998）。また、新潟・富山・石川・福井の北陸四県では、当該地方の石製品について扱われる中で、茶臼も集成されている。そして、国内出土茶臼を対象とした論考「日本における茶臼の研究」（桐山 1996）では、茶臼の伝来と普及、用途、生産地の問題をあげ、詳細な検討を加えている。特に、石材からA・B・C類に、台座文様から1～5類に分類し、出土茶臼を3期変遷を示した。第1期は13世紀中葉から15世紀前半とし、その分布が寺院に偏る時期（B1類、C1類、A1類）。第2期は15世紀後半から17世紀前半とし、全国的に城や館・集落で出土するようになる時期（出土遺跡数・点数ともに大幅に増加し、B・C類が大量）。第3期は17世紀後半以降として、都市遺跡や寺院・武家屋敷などに限られていく時期（出土遺跡数・点数が急激に減少し、C類が少なくなり、A・B類、中でもA2類・B2類・B3類が主流）としている。

さて、群馬県においても臼の出土は、従来より多くの例が報告されている。そうした中で、1996年に刊行された『新編高崎市史 資料編3』（志田 1996）では、穀物臼を含めた高崎市内出土資料について、石材からみた地域の傾向、臼径等の法量の問題、臼面の挽き目の分画数について述べられており、県内における地域様相に触れた点で特筆される。しかし、県内の出土資料を全体的に包括した研究は皆無であり、特に茶臼の実相は未だ不明瞭である。

本稿は、所謂「臼類」の中でも茶臼に視点をしぼり、基礎資料の提示という点で県内出土資料の集成・分類を行うこととした。また、県内に残る茶に関する古記録として、永禄八（1565）年の「長楽寺永禄日記」が存在することから、これについても紹介しておく。その上で、県内の茶臼の実態を明確にすることを、今後の研究課題としていきたい。

なお、本稿を草するにあたって、谷藤、山下、水谷の3名が作業・検討してきた結果を水谷が主となってまと

め、文責は文末に明記した。

（谷藤・水谷）

2. 茶臼の略研究史

茶臼とは挽き臼の一種類で、葉茶を挽いて抹茶を製造するための道具である。上臼と下臼によって構成され、その回転運動によって葉茶を微粉碎するものである。

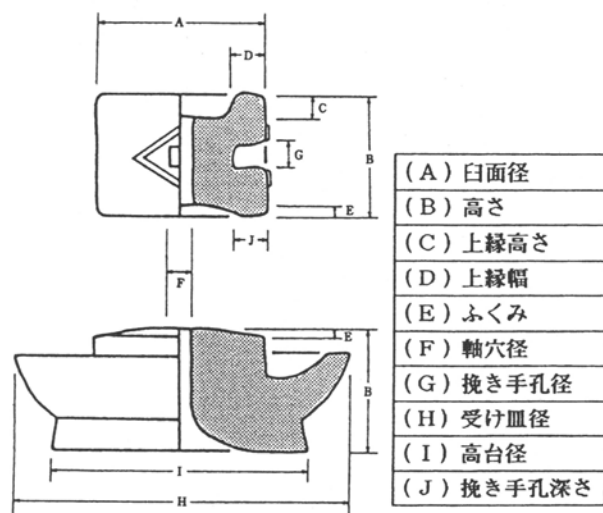
茶臼の形態については、桐山氏によって詳しくまとめられている（桐山 1996）。ここでは、氏の成果を元に茶臼の形態の特徴およびその変遷について触れ、さらにその後の資料増加についても確認しておきたい。

(1) 茶臼の形態の特徴

まず上臼では、臼の中央部に「軸穴」が貫通しており、ここから原料の葉茶が供給される。つまり、茶臼では軸穴が供給孔を兼ねている。上臼上部の周縁は一段高くなっており、この部分を「上縁」と呼ぶ。この上縁にこまれた凹部のことを「くぼみ」と称し、葉茶はここから供給口を経て臼内部へ供給される。上臼を回転させるために、臼の側面に挽き木が取り付けられるが、この挽き木を差し込む孔を「挽き手孔」と呼んでいる。茶臼では対となる位置に合計2孔が穿たれており、この挽き手孔の周囲には装飾文様が施される場合がある。この装飾は「台座文様」と呼ばれる。

下臼では、上臼同様に心棒を固定する「軸穴」が貫通している。また、茶臼の特徴として、受け皿が造り出されていることが挙げられる¹⁾。これは、微粉碎された抹茶を受け止める機能を持っている。この受け皿から下は高台状の台部となっている。

上下臼ともに、葉茶を粉碎する作業面のことを臼面と呼び、ここには挽き目が刻まれている。穀物臼の挽き目と比べると、比較的精緻な目である。また、上臼の臼面は凹状にへこみ、下臼では凸状に膨らんでいる。上下臼



第1図 茶臼の部分名称

面を組み合わせた時に、この部分が隙間となり、この凹凸をそれぞれ「ふくみ」と呼んでいる。上下臼面が直接的に接し、葉茶を粉碎する部分は「擦り合わせ部」と呼ばれる。

以上が、茶臼の主な形態的特徴と各部位の名称である。こうした特徴と各部位名称および計測位置を示したのが図1であり²⁾、各部位を示すA～Jまでの計測位置は、本稿での一覧表(表5～11)と対応している。

(2) 茶臼の変遷

我が国に抹茶法の喫茶を招来したのは、栄西または榮西に代表されるような留学僧によるとされている。茶臼が国内にもたらされた時期は明らかではないが、その出現は12世紀末頃以後とみられよう。

国内最古の茶臼出土例は、大阪府西ノ辻遺跡の13世紀中頃のものであるという(桐山 1996)。同じく、神奈川県鎌倉市小町2丁目345番一2地点遺跡、同鎌倉市大倉幕府周辺遺跡群出土資料や、同海老名市本郷遺跡出土資料も13世紀代とされている(堀田 1998)。この時期の茶臼は、国内では初源期とされているが、類例が少ないことから実態は不明なようである。14世紀代の資料では、伝世品として高知県吸江寺所蔵の貞和5(1349)年の銘を持つ資料が知られている(三輪 1978b、岡本 1985 ほか)。韓国新安海底文物に含まれる石臼は、形態的に小型であることから茶臼とされており、14世紀前半頃に中国から日本へ持ち込まれるはずの唐茶磨であったと考えられている。他に、富山県下村加茂遺跡出土例が13世紀後半～14世紀前半の資料とされ(越前ほか 1999)、後述する群馬県尾島町長楽寺遺跡出土例は15世紀初頭以前と考えられている。

14世紀の史料である『金沢貞顕書状』からは、鎌倉幕府の要職を歴任する人物でさえ、容易に茶臼を入手できなかったことが確認でき³⁾、この時に茶臼を所有していたのは、禅宗寺院の称名寺であったことが知られている。14世紀の茶臼は寺院の持物として存在したようであり、極めて入手しがたい希少品であっただろう。愛知県瀬戸市鷲鷯からは、15世紀とされる陶製茶臼が出土しており、国内における喫茶の普及を示す資料としての評価がある⁴⁾。

13世紀中葉から15世紀前半は、桐山氏による3段階の画期のうちのI期に該当する。続くII期は、15世紀後半から17世紀前半とし、国内において茶臼が増加する時期としている。出土茶臼の多くはこの時期とされ、資料数が急速に増加する時期とされる。17世紀後半以降をIII期としており、茶臼の出土は減少するという。

一方、形態的特徴から年代を検討した研究については、主に以下のものがある。

三輪氏は臼面の挽き目に着目し、挽き目が周縁まで達

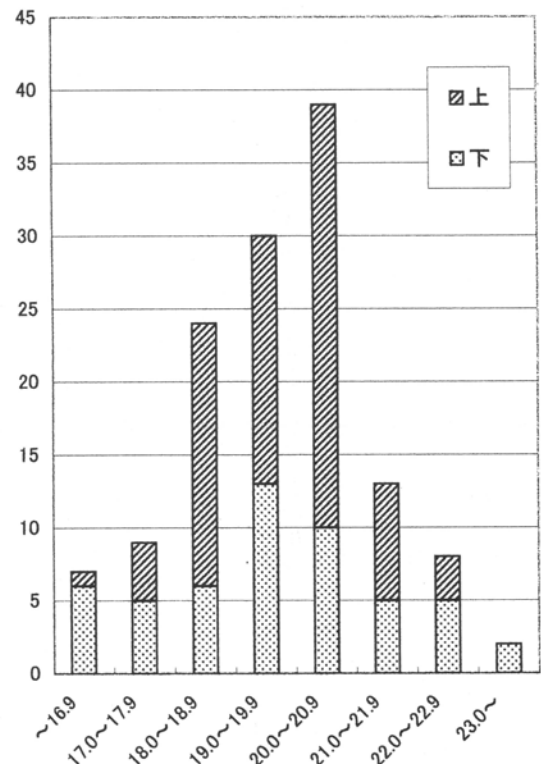
するものは古く、達さないものは新しいとしている。また、唐茶磨の形態についての指摘もある(三輪 1978a)。桐山氏は、臼面の形態(分画)、直径、上臼の直径と高さ、台座文様、下臼の直径と受け皿径、台座の高さと径について詳しく検討し、先述の3期区分の提示を行っている(桐山 1996)。神奈川県資料を扱った堀田孝博氏は、13世紀代の茶臼の特徴として、臼面径が小さいこと、受け皿が肉厚なことを挙げている。また、臼面径の大きさや高さによる変遷についてもふれられている(堀田 1998)。(水谷)

3. 県内出土茶臼の様相

県内の茶臼を集成してみた結果、第4～12図に示した339点もの資料が存在していた。ここでは、これらの資料の法量、石材、台座文様、出土遺構、そして年代について、以下に記述する。

(1) 法量からみた茶臼

茶臼を特徴付ける要素として、臼面の径の問題がある。これは、穀物臼が概ね30cm前後の大きさ⁵⁾であるのに対して、茶臼の臼面径はそれよりも小さいとされている。第2図のグラフで示したように、県内出土茶臼の臼面径は18～20cm前後に集中する。このことから、ある程度の規格性をもって製作されたことが考えられる。臼面径の大きさは茶臼の重量に関わるもので、同石材であれば臼面径が大きいほど重量があると言える。重量は葉茶の粉



第2図 茶臼面径の法量

砕に影響すると考えられ、臼面径の規格性からは、それが粉碎に適した大きさであったと推察される。

一方、茶臼は、本来的に使用によって摩耗するものである。出土時の高さは使用を経たものであり、製作時の高さを示しているものと考えられる。つまり、本来（製作時）の高さは、出土時の高さと同じか、それよりも高かったものとするべきである。

臼面のふくみについても摩耗が考えられ、第7図152や第10図273のように、臼面が偏平に近い資料をみることができる。本来のふくみは約5mm前後であるとされている（三輪 1978a）。出土茶臼のふくみからは、その使用頻度について推察できると考えられる。複数の資料のふくみを比較した時に、その残存が多いほど製作時の姿に近い可能性がある。逆に、摩耗によってふくみが減少したものは、その分の使用が考えられる。

同様に、挽き手孔の位置からも摩耗の度合いを知る手掛かりとなる。高さの中軸より下側（臼面寄り）に挽き手孔が位置する場合（第9図212・228など）、やはり、高さの減少をみることができる。このような視点から検討を行い、茶臼の使用頻度を判断できるのであれば、本来的な茶臼の高さを推定することもできよう。ふくみの大きさと挽き手孔の位置は、上記の点で重要である。

この他に、上臼上縁部や下臼受け皿部、高台部などは、製作時における法量を残すものと考えられ、茶臼の時期差や地域差を検討する上で、注目される部位である。

(2) 茶臼に使用される石材

茶臼に使用された石材の内訳を表1に示した。339点中、石材について記載のあったものは299点である。この中で最も多いのが、安山岩系の石材である。県内での主

表1 石材別数量

安 山 岩	831	安 山 岩 系 282
輝 石 安 山 岩	8	
硬 質 安 山 岩	1	
粗 粒 安 山 岩	123	
粗粒輝石安山岩	53	
多 孔 質 安 山 岩	4	
多孔質輝石安山岩	9	
多孔質黒色安山岩	1	
砂 岩 ・ 砂 岩 質	9	
斑 れ い 岩	2	
ひ ん 岩	1	
溶 岩	2	
花 崗 岩	1	
凝 灰 岩	1	
浅 間 軽 石	1	
計	299	

要石材が安山岩であることから、最も入手しやすく、且つ比較的加工しやすい石材として選択されたものと考えられる⁶⁾。中・近世の五輪塔や宝篋印塔などの石塔類に使用される石材も安山岩が主体であることから、それは在地的な石材としてとらえられる。安山岩系石材を使用した茶臼は県内各地からの出土が認められる。後述する前橋市小島田八日市遺跡は茶臼製作に関わる遺跡とみられ、ここで出土した茶臼の未製品は、すべて粗粒安山岩が使用されている。同遺跡の存在から、県内で粗粒安山岩を用いた茶臼製作が行われていたことが明らかである。在地的な安山岩系石材が圧倒的に多いことから、地域内での茶臼生産と流通が示唆される。製作遺跡としては小島田八日市遺跡以外にも存在することが予想でき、類例の増加が期待される。

一方、こうした在地石材のほかに、数量的に希少な石材を使用した茶臼も報告されている。花崗岩やひん岩、凝灰岩などといった石材の違いは、何に起因しているのだろうか。現状では明らかにできないが、時期差や搬入品の可能性を視野に含めておく必要がある。また、高崎・富岡・太田市からは、砂岩・砂岩質の茶臼が出土している。中でも、高崎・富岡市からの出土する石材には、牛伏砂岩が目立ち、両市域が牛伏砂岩の産出地に由来することからと考えられ、より在地石材による製作の状況が見えてくる。なお、尾島町長楽寺遺跡からは、斑れい岩製の茶臼が出土しているが、これについては後述する。

(3) 上臼の台座文様について

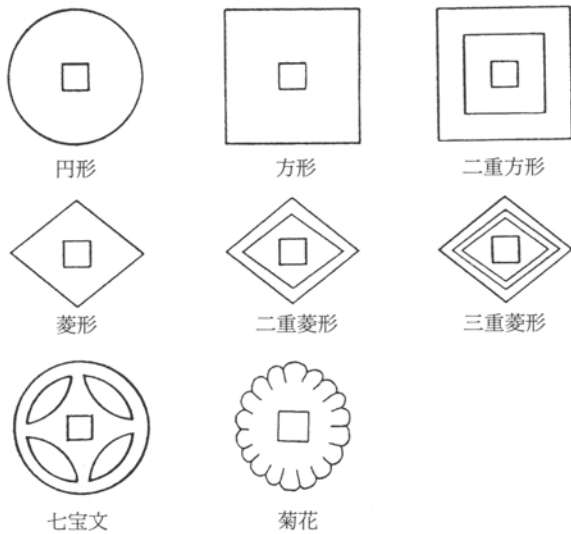
集成資料339点中、上臼は124点認められ、この中で台座文様の有無を確認することができたのは81点である（表2）。県内では、円形・方形・菱形、他に二重方形や二重・三重菱形、菊花文や七宝文の文様が確認できた⁷⁾。また、明らかに台座文様を持たない資料が9点存在する。ここでは上臼の台座文様について触れておく。

最も多く確認されたのが、菱形の文様である。太田市で7点、前橋市で5点と多いものの、全体的には県内各地から出土しており、分布的特徴はみられない。円形文様についても、同様である。方形文様は、県内での出土数は少ない。

台座文様の中で、二重方形については「近世集落で一般的な文様であったようだ」とされる（堀田 1998）。県内出土の二重方形文様は7例確認できたが、尾島町長楽寺遺跡や前橋市下東西遺跡などの寺院関連遺跡や、大胡

表2 台座文様別の数量

円形	方形	二重方形	菱 形	二重菱形	三重菱形	七宝文	菊花	あ り	な し	計
17	2	7	26	5	1	8	1	5	9	81



第3図 台座文様模式図

町大胡城本丸北大堀切り遺跡といった城郭跡からも出土しており、近世集落に特有とする傾向はみられない。ただ、堀田氏が指摘しているように、二重方形は比較的広く長く使用された台座文様とも考えられる。

これらの他に、七宝文とした台座文様が存在する。この文様は、「変則的な円形」で「花卉の退化した形」(桐山 1996)、「十字形手裏剣文様」(矢島ほか 1998)と呼称された文様であるが、大胡城本丸北大堀切り遺跡の報告(山下 2001)で七宝文と呼んでいるように、この文様は従来より「七宝文」と呼ばれてきた文様であることから、筆者も「七宝文」として扱う。この文様は、茨城、神奈川県の実成や、北陸四県の実成では確認されておらず、今のところ東京都葛西城から1点出土している(桐山 1996)。しかし、県内では8点の七宝文が確認され、前橋市を中心とする県央部周辺からの出土がみられた。地域的な偏在の可能性も含めて、今後の類例の増加を待ちたい。

尾島町長楽寺遺跡出土の菊花文様を持つ資料については、後述する。

(4) 茶臼を出土する遺構

県内での遺構別出土数を、表3にまとめた。この中で、特に多いのが、井戸や溝、堀からの出土である。明らかに、遺構に伴う出土といえる例は、少ないのが現状である。

藤岡市寺前遺跡群3区からは、601号土坑よりほぼ完形となる上臼が、割れた状態で底面から出土している(第8図188)。また、地下式坑からの出土が、2遺跡3例確認された。大胡町堀越中道遺跡からは、完形の上臼(第10図253)が1点。前橋市五代木福Ⅰ遺跡からは、2個体の上臼破片(第12図316・317)が出土している。

表3 遺構別の出土点数

出 土 遺 構			出土点数
堀	・	溝	126
井		戸	101
土		坑	15
墓			1
地	下	式 坑	3
豎	穴	遺 構	5
掘		立	2
ピ	ッ	ト	2
石	積	み	5
石	敷	き	3
集		石	5
配	石	遺 構	1
池			6
溜		井	2
墓		壇	1
グリッド・トレンチなど			25
表	採	な ど	17
そ	の	他	11

地下式坑から出土する茶臼については、それを墓とした上で、仏事における「尊茶の儀」を重視する意見がある(江崎 1985)。五代木福Ⅰ遺跡では、茶臼破片と共に、いわゆる土製茶釜が出土している。この事例は、「尊茶の儀」に関係する可能性があり注目される。また、神奈川県下鶴間城山遺跡でも、地下式坑から完形で上下セットの茶臼が出土しており、完形品という点で堀越中道遺跡例と共通する部分がある。地下式坑と茶臼の関係を考える上で、好資料といえよう。なお、寺前遺跡群3区601号土坑も墓である可能性も高く、併せて今後の検討を要する。

(5) 県内出土茶臼の年代

出土茶臼の年代については、その多くが遺跡の年代に拠っている。県内では13世紀から19世紀以降とされる遺跡から出土しており、中でも15・16世紀の遺跡からの出土が目立つ。国内の傾向ではこの頃に茶臼が盛行するとされており、県内の傾向としても矛盾しない。そうした県内資料の中から、年代について詳しく推察できる資料として、尾島町長楽寺遺跡出土例と前橋市五代木福Ⅰ遺跡例を挙げておきたい。

長楽寺遺跡出土の茶臼(第1図1・2)は上臼と下臼の破片である。両者ともに同一石材を使用し、臼面径も同様な数値を示すことから上下セットになると考えられている。1の上臼では、1号井戸出土破片と1号基壇出土破片の接合が確認されている。この茶臼の年代は報告によると15世紀初頭の年代が与えられており、それを溯

ることは確か、とされている。

石材には斑れい岩が使用されており、上臼の台座文様には菊花文の文様が施されている。国内で斑れい岩を使用した茶臼は本例のみで、また、菊花文様もこれだけである。上下臼ともに臼面径は18cmと小振りで、上臼はその使用をふまえた上でも高いようである。上臼の臼面径が小さく、それに対して高さがあるという特徴は、三輪氏の指摘する唐茶磨の特徴と一致している。石材や台座文様を含めて、この茶臼が唐茶磨である可能性も考えられている。

県内で年代の推定できる資料として最古のものであり、国内でも類例の少ない時期の資料である。

五代木福Ⅰ遺跡では、先述したように、地下式坑から茶臼の上臼破片が2点出土している(第12図316・317)。316には菱形の台座文様が施され、317では台座文様はみられない。さらに、軸穴の形態の違いから両者は別個体と考えられる。この茶臼と共伴していわゆる土製茶釜が出土しており、これらは遺構底面に近い位置からの出土と報告されている。土製茶釜は、対となる耳部下側にそれぞれ火除け状の鐙が付き、体部には鐙が巡らない。この形態から宮瀧交二氏の分類による「土釜B類」としてとらえることができ、この形態を持つ一群は「少なくとも15世紀代には存在していただろうことが確実視され」、下限については判然としないとした上で「16世紀代に及ぶであろうことが窺われる。」としている(宮瀧 1991)。茶臼の年代を検討する上で参考となる事例である。

後述するが、前橋市小島田八日市遺跡は、県内唯一の茶臼製作に関わる遺跡とみられる。同遺跡からは茶臼の他に、穀物臼や五輪塔などの未製品も出土している。ただし、茶臼の製作時期については決め難い点もある。

(水谷)

4. 茶臼の製作について

先にも述べたように、茶臼の製作にかかわる遺跡として前橋市小島田八日市遺跡をあげることができる。第7・8図に示した157～164と、図示できなかったもの4点が出土している。これらの内、157～159は上臼、160～162は下臼であることは理解できよう。上臼の158を観察すると、側面の台座文様部分に本来は挽き手孔が穿たれているはずであるが、この資料には穿たれていない点で未製品と考えられる。また、上面くぼみ部の軸穴周囲に一段高い部分がみられることも気になる。下臼の161を観察すると、受け皿部分の調整(磨きも含め)が他の下臼に比べ粗い点、臼面の調整も粗い点で未製品と考えられる。162では受け皿の調整は進んでいるものの、臼面にも細かい工具痕がみられ、側面には粗い工具痕を観察することができ、やはり未製品と考えることができる。さらに、163は全体にかなり粗い工具痕を残すもので、そ

の形状から下臼の未製品と考えることができる。同様に164も下臼の未製品と考えられるが、同遺跡からは石鉢の未製品も出土していることから断定はし難い。図示できなかった4点⁸⁾については、径が21cm前後を計る比較的小振りの円筒状の形状を呈し、側面及び上下面に粗い工具痕を残すものである。163の未製品のあり方から考えると、この4点は上臼の未製品と考えることが妥当であろう。

この小島田八日市遺跡の未製品資料を比較すると、上臼・下臼ともに大きく製作工程の差をみることができる。それは、158・161・162にみられるように、茶臼としての成形・調整がある程度進んだ段階。163及び図示できなかった4点のように、かなり粗い成形の段階とに分けることができる。仮に、素材→粗成形→成形・調整→最終調整といった製作工程を想定するならば、163等は粗成形段階、158・161・162は成形・調整段階にあるものと考えられ、その後最終調整段階(挽き目を刻む段階)を経て製品となるものと推測できよう。

なお、これらの石材には、すべて粗粒安山岩が用いられている。
(谷藤・水谷)

5. 長楽寺永禄日記について

新田郡尾島町世良田に所在する長楽寺は、日本臨済宗の開祖であり、蒸した茶葉を保存のためにつき固めた餅茶(団茶)から、粉末にした茶(抹茶)を予め碗にいれ、これに湯を注ぎ茶筴で攪拌する「抹茶式」の点茶法を最初に日本にもたらした人物とされている栄西(1141～1215)の高弟である栄朝(?～1247)により承久三年(1221)に創建された名利である。

この寺には、永禄八年(1565)正月朔日から九月晦日までの九ヶ月間を記した日記が伝来する。日記は天文十七年(1548)六月八日に長楽寺住職に任命された賢甫義哲により記されたもので、三冊の冊子(第一冊は正月朔日～三月晦日、第二冊は四月朔日～五月晦日、第三冊は六月朔日～九月晦日)から成る。

本日記は1965年に県指定重要文化財に指定され、永禄日記3冊の指定名称が付されている。勝守(1973・1974)は「未刊史料『永禄日記』について」で史料として紹介することの目的で活字とし、日記の内容を長楽寺における行事及び日常生活の様子と由良氏の動向等の項目を詳細に挙げている。

日記の名称は、第一冊の表紙に「永禄八年乙丑自春王鶏日々記」から取られたものであり、県内では「永禄日記」の名で呼び慣らされているが、今回使用する題名は、「群馬県史」資料編5に収録され、「長楽寺永禄日記」(千々和 1978)とした。

この日記の内容は、大きく三つに分けられ、(1)義哲をとりまく政治情勢の記載である。金山城主である由良成

表 4

『長楽寺永禄日記』より茶に係わる事項

月 日	内 容
1月1日	祝儀致之、佐・岱・観・端・也・真・靖七人也、徳ヲ招ニ不被来、□種之茶子ニテ喫茶、～
2日	菓子ヲ用、茶ヲ喫シ、～各ニハ茶堂ニテアルニマカセノマス、～
3日	菓子ニテ喫茶、～カン酒ヲ奔走サセ、雲脚十袋ツツトラセ返也、一二三ヶ日共ニ西寮ヨリ茶子又茶ヲタテ送ツル、～
4日	登山ノ用意イタサス、～実城へ、如例年五十疋ニ茶廿袋・雲脚十袋ヲ重テツニユイ合、二十疋御内方へ、～
5日	朝、仙袂ヲ一ニケトリ、喫茶、～千手・万寶ヨリハ、茶五袋ツツモチ来ラレキ、～
7日	茶子ニテ喫茶、七種之粥ヲ各相伴ニテ用、～茶子ニ茶ヲ出、ヒキワタシニテ冷酒、～
13日	シタタメ（食事）ヲサセ、酒ヲケンサン（建盞）ニテノマセツル
19日	田嶋其外五袋ツツ遣也、歸ニ洞春ヘコスヘキ由申付、茶十袋ヨキ茶也、～
22日	～普請之儀聞アワセニ来ル、酒ヲカンシテ、テンモク（天目）一進返也、
26日	～冷酒一献、椀麵、カン酒、当盞五之上、天目ニ一、カンシテ茶トテ出進返也、～
2月3日	東坡（味噌）ヲ卒度焼、味、茶一服吞、～入夜雲門ヲ半ヶ用、喫茶、～
10日	山ニテ焼餅ニヶ用、実城内カタヘムギノ粉ホカイニマツチャ（抹茶）、
13日	石橋ハ連歌之会之座ニアルトテ不出合シテ、各返也
18日	佐子者此日来キ、ホシ松タケニ宇治アブリノ茶ヲ一袋持来、～
22日	早晨計也、曉ハ義海和尚献茶湯、焼香、礼拝、朝ランサンヲニ串用、喫茶、～入夜ヤキメシヲ四五用、喫茶、～
27日	早晨計、朝、ヤキメシヲ二用、喫茶、～大茶一斤出返也、
3月5日	～此上ニ神仙ヲ茶ニテ卒度用、～雲門ヲ東坡ニサンセウヲ入、ツケアフリ、田楽ノヤウニシテ少用、喫茶、
12日	（馬場）左衛門五郎ハ時過テ来、酒ヲテンモク（天目）ニテ二進、
13日	寶泉寺ニアテノミ（実）ヲフセ、カヘリニ苗木ヲ十本計コギ、祐書記、茶畑ノ南ニウユ、
25日	山ヘ登、坂中御入ヘ饅外居一、抹茶一器ソユ、～西城ヘモ同抹茶ヲソヘマイラス
4月10日	葉ナリノ茶ヲ始テトラス、池ノハタヲツマス、別木五半、無上十二、ヒダシニ、本二也、～茶フルイニササスルナリ
11日	新茶ヲ旦那（由良成繁）ヘ三袋コフクロニシテ越
15日	岱ハ此日モ葉成ヲ卒度アブラスル
17日	茶ヲ始テトラス、ウネカシラノホキツル葉計トル、チンジュノ前、僧堂ヲハ皆ツム、法堂ヲハウネカシラ計ツム、～
20日	留守ニテ茶イタシアグ、好茶十七斤、吹出二斤、本一斤半ト伝ヘリ
21日	茶ヲ午刻時分迄イタシツル
22日	新茶五実城へ、～新茶別ニ注文アリ
23日	十如坊茶ヲトラスル、無上七、別五アリ
25日	アブリコヲ組スル也
26日	法堂其外以前之ツミ残シヲツマスル
27日	普光廊カノ茶ヲツマスル、
29日	茶ヲモ未刻アブリオサム、ヨキ茶十四斤半、本三斤也
5月3日	十如茶ヲトラスル、～夜更ルマテ茶ヲアブル、トコーニテスル也
4日	茶ヲ巳刻イタシアグ、上茶二斤アリ、
8日	実城内カタ（奥方）ヘ抹茶一キモタス
11日	～普請モセス、道嚴ニ大茶一斤、好茶三マイラス、金彦・平藤・拾助ニハ大茶一斤ツツ出之、～
18日	今日茶ヲトラス、常住衆・塔頭衆ヲ以ツマスル也
19日	終日茶ヲアフル
20日	入夜茶ヲアブリオサム
23日	内カタヘ抹茶一器、御乳ヘモ一、又金筑ヘモ一キコシツル、
6月3日	焼餅ヲ二三ヶ用、喫茶、～内カタヘ麵粉外居一・抹茶一器、～
17日	新造御乳ヘマツ茶、又丸内カタヘモ、又金筑ヘモ一器、合三ヶ所指遣也
19日	朝ハ焼餅ヲ一用、喫茶、此日朝ヨリ茶ヲトラスル
20日	饅ヲ少用、喫茶、未明ヨリ茶ヲアフル、～
21日	ヒルハウンドン少用、午刻茶ヲアブリアク、～
24日	泉蔵司ハコレニテ茶ヲアブル
7月12日	～観音堂ヘ蠟燭五挺・茶三・鳥目一枝遣也、金筑ヘ八十挺ニ茶三ソエコシツル、郭カタヘモ茶上下、～
18日	～抹茶一器指添、～御つばね・御乳ヘモマツチャー器ツツ指越也
22日	早晨計、茶子少用、喫茶、～桃ヲ肴ニシテ、藤紀ヘ抹茶一合遣也、
23日	早晨計、茶子少用、喫茶、八朔茶袋ヲツクラスル、～
25日	～、ヒルハ瓜（瓜）ヲニキレ三キレー兩度用、鹽茶ヲノミツル、
8月3日	～、茶ヲトルヘキ支度ニ、今日上草ヲ終日トルナリ、
4日	～、茶ヲツマスルナリ、饅ヲ一用、喫茶、
13日	御廐之平左衛門モ来、～麦ヲクワセ、酒ヲススメ、大茶一斤トラセ返也
9月2日	茶子少用、鹽茶ヲ喫シ、～
20日	御乳ヘマツ茶一器モタス、又坂中ヘモ存子ニ抹茶ヲ一キモタセ～

繁は永禄三年（1560）以来、上杉方の武将として厩橋城の北条高広らと連携して北条・武田軍と対峙し、金山城の動向が詳細に知れる。(2)地方禅院としての毎日の勤行（小野瀬 1987）や諸行事、(3)義哲の日常生活が記載され、16世紀中頃の様相を物語る極めて貴重な歴史資料である。

今回は、義哲自身の日常生活で頻出する喫茶の状況や贈答品としての茶、茶の栽培などに関係する記載に注目し、この茶に係わる事項について考える。

「長楽寺永禄日記」から読み取れる茶のあり方

義哲は、日付の次に「早晨」と記し、実施された言風経が続いて書かれているのが大半である。「早晨」とは早朝の務めと解釈され、言風経（加護を祈念・感謝してお経を読む）が行われた勤行の後等に喫茶（茶を呑む）を日常茶飯事の如く嗜み、来客には茶子や菓子添えて茶を出したり、茶を一服吞ませている。

その喫茶に伴う食べ物は、焼餅・茶子・菓子・饅頭・東坡（味噌）・仙袂・雲門（餅）・ランサン・草餅・芥子餅等が記載され、禅宗特有の隠語で記されるものがあり不明なものもある。喫茶が抹茶か煎茶かは不明である。また、特殊なお茶として、塩茶を7月25日と9月2日に喫している。

これらのお茶の栽培は茶摘みの記載から寺院の周辺（池の端・鎮守の前・僧堂・法堂など）で行われていると考えられるが、3月13日の条には「祐書記（不明）ヲ茶畑ノ南ニウユ」と記し、茶畑の存在を示唆している。

茶摘みと精製は4月10日から8月4日まで間に行われ、茶摘みから茶葉の選別、アプリコ（焙籠）を使用してアプリを行い精製している。茶摘みは4月では10日、17日、26日、27日、5月では3日と18日、6月19日、8月4日の8回が行われている。4月10日の茶摘みが一番茶に該当し、翌日には新茶を由良成繁に届けている。

別木・無上・ヒダシ・本の分類は不明であるが、製品は好茶・吹出・本や上茶に分類されたことが分かる。

義哲は出来上がった製品を自分自身の喫茶に使用するほかに、年賀や祝儀の贈答品・手土産として袋詰め茶・雲脚・好茶や抹茶・大茶として使用したと考えられる。正月4日には、金山城に年賀の挨拶のために登城した際に、贈答品として由良成繁や家臣の武士等に金子や扇子等の他に茶と雲脚（品質の劣る茶）を送っている。

人 名 年 賀 の 品		
実城（由良成繁）	五十疋・茶廿袋・雲脚十袋	
内方（夫人）	二十疋	
六郎殿（由良国繁）	扇子一本	
熊寿殿（長尾顕長）	扇子一本	
梅殿	扇子一本	
十郎殿	黄麗鳥	雲脚十袋

中書	二十疋	〃十袋
ヲチ合		〃十袋
右衛門佐殿	二十疋	〃十袋
丸橋右（丸橋右馬助）	十疋	〃十袋
開山別当	扇子一本	〃十袋
三塔頭	三十疋	

好茶の事例は、1月19日 「田嶋其外五袋ツツ遣也、～茶十袋ヨキ茶也」と1月29日 「勝老母へ好茶五袋遣ツル」がある。

抹茶は、金山城主の由良成茂の奥方や「坂中御入」と記される成繁の嫡子国繁等の一門と家臣の金谷筑後守等に遣わされている。その単位は器と合が知れる。大茶は斤の単位で扱われている。

課題と問題点

長楽寺の創建にかかわる栄西の弟子である栄朝が栄西から喫茶法を学んだかは不明であるが、中世の禅院に喫茶が深く結びつき、抹茶が飲まれていたと考えられる。日記が書かれた16世紀は喫茶の大衆化が進んだことが伺われ、遺跡からの天目茶碗や茶臼の出土量の増加からも理解される。義哲自身が日常的に「喫茶」を嗜み、親密な関係にある由良一門とその家臣等にも喫茶が浸透し、「抹茶」も飲まれていたが、農民や商人等の階級まで一般化していたかは不明である。

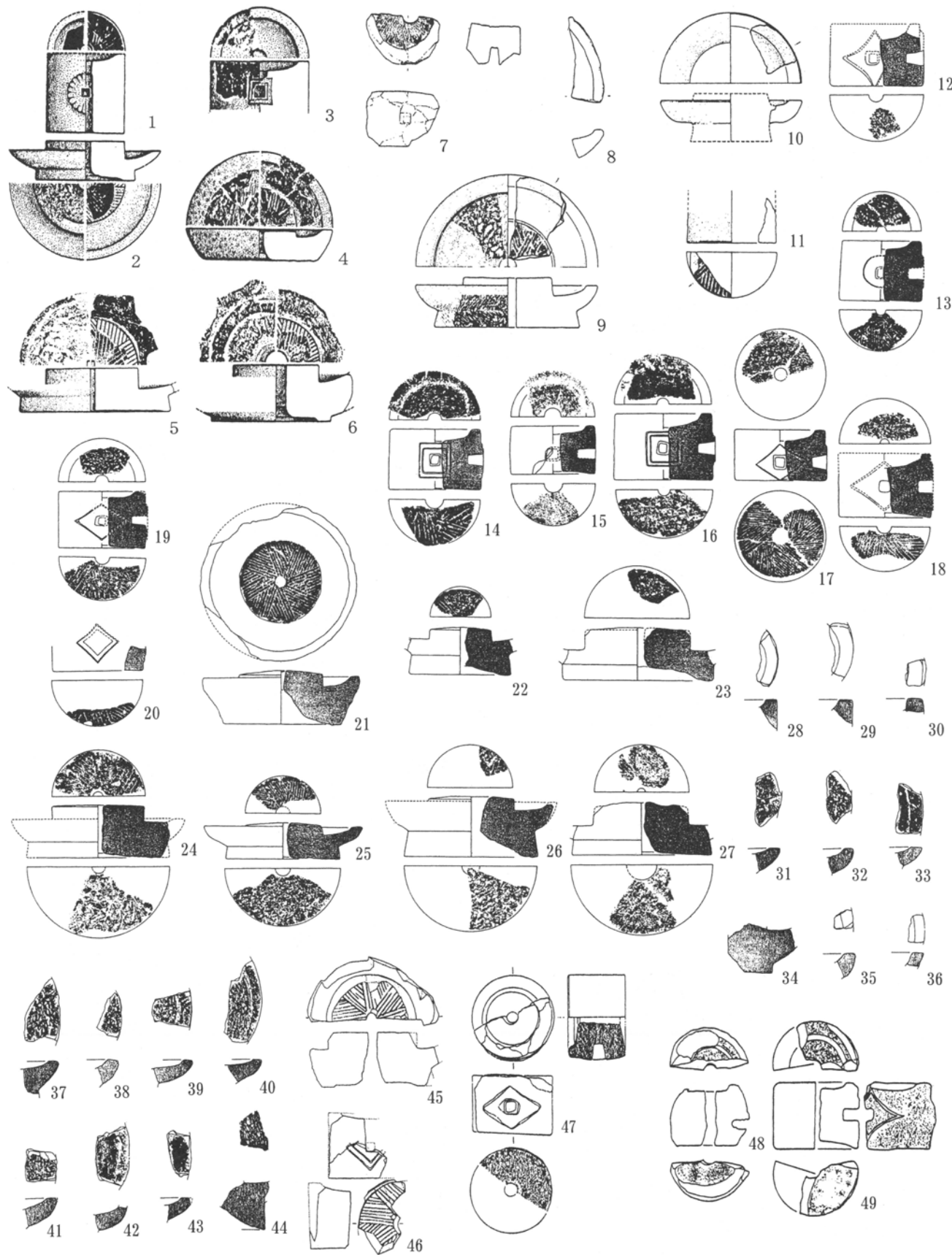
製品となった茶には、好茶・吹出・本・上茶・下茶等に分類されるが、「抹茶」に使用するものや飲み方に違いがあるのだろうか。また、塩茶とはこれらの製品に塩を加えて飲む茶であろうか。（山下）

6. おわりに

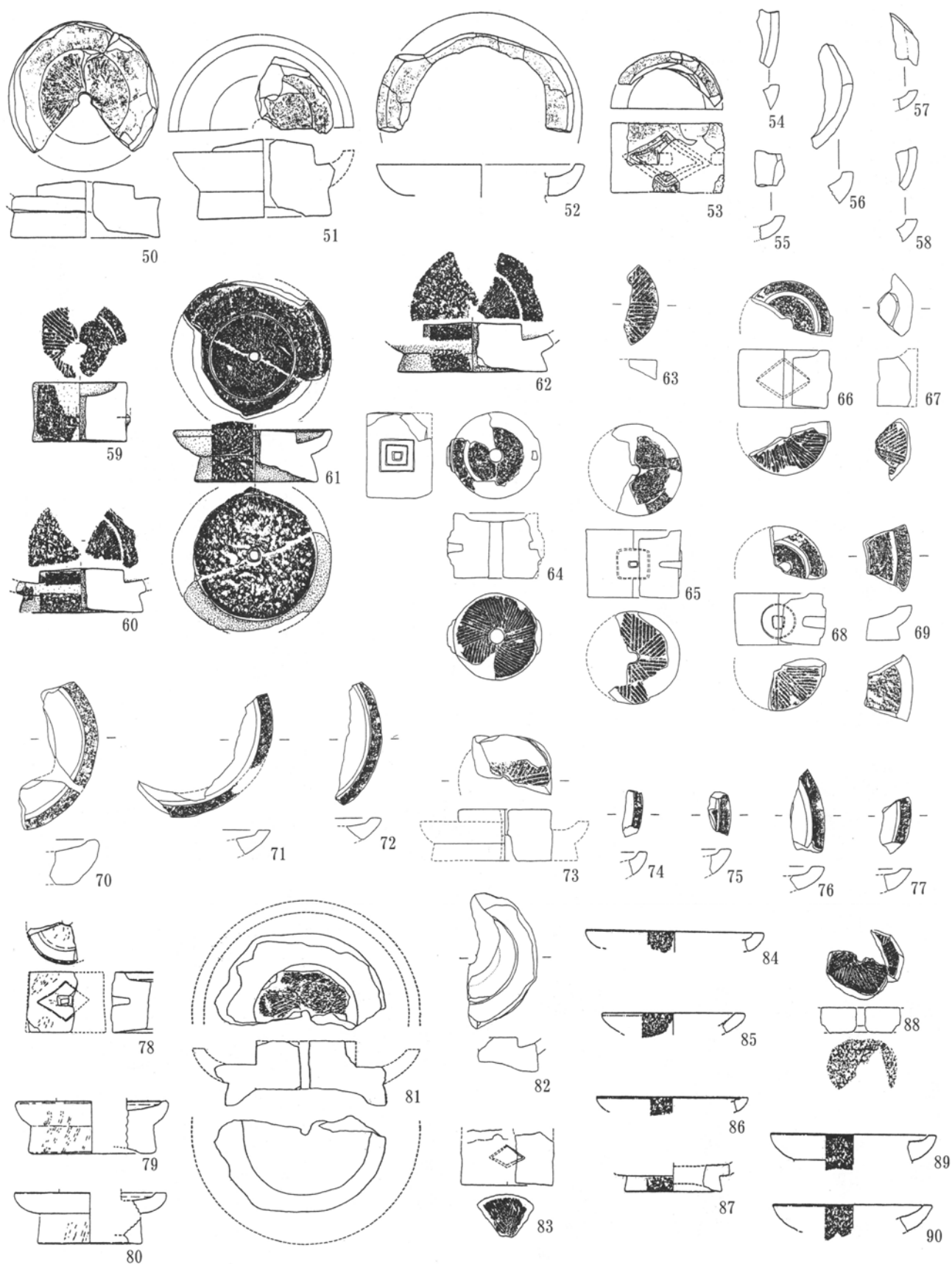
発掘調査で出土する茶臼について、「茶臼とは何か」という疑問を感じ、それを発端として県内出土茶臼の集成を行ってきた。その結果、新たな傾向・視点が見出せた観がある。いくつかの点を記述し、おわりにかえたい。

県内における茶臼の出土例は、現在までに339点を確認することができた。周辺県での集成では、神奈川県62点、茨城県21点という出土量であり、その量に比べて、本県での出土量は圧倒的に多い。この数量の差は、何を意味しているのだろうか。ただ単に、地域的な特徴とだけ見てよいのであろうか。

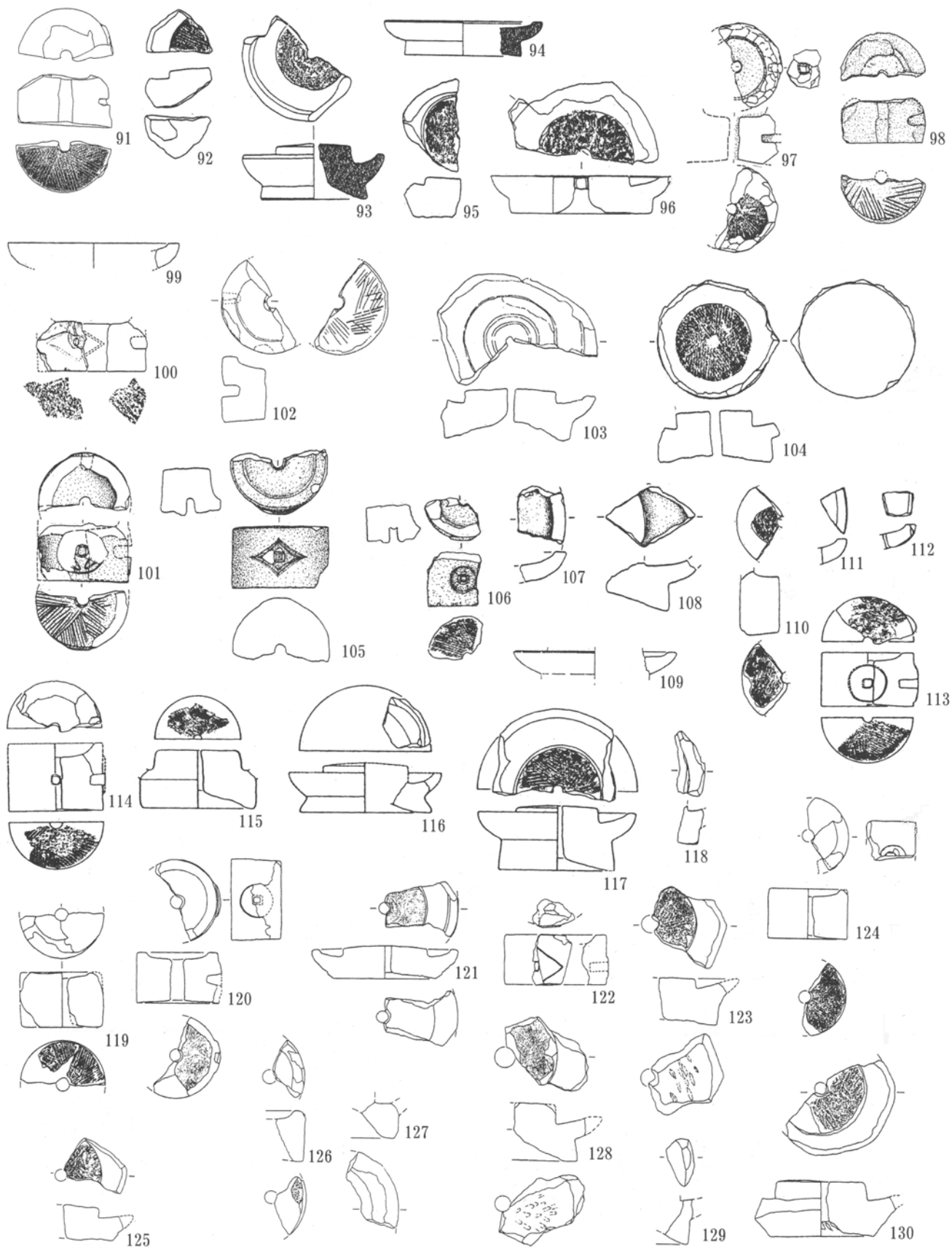
また、県内で出土する茶臼は、主に安山岩（特に、粗粒安山岩・粗粒輝石安山岩）を用いた製品であることが集成の結果となった。そうした一方では、小島田八日市遺跡のように、茶臼の未製品（粗粒安山岩製）が出土していることから、製作にかかわる遺跡と考えられ、製作工程を知ることでもできた。当然、粗粒安山岩等が県内で産出する石材であることは言うまでもなく、在地石材に



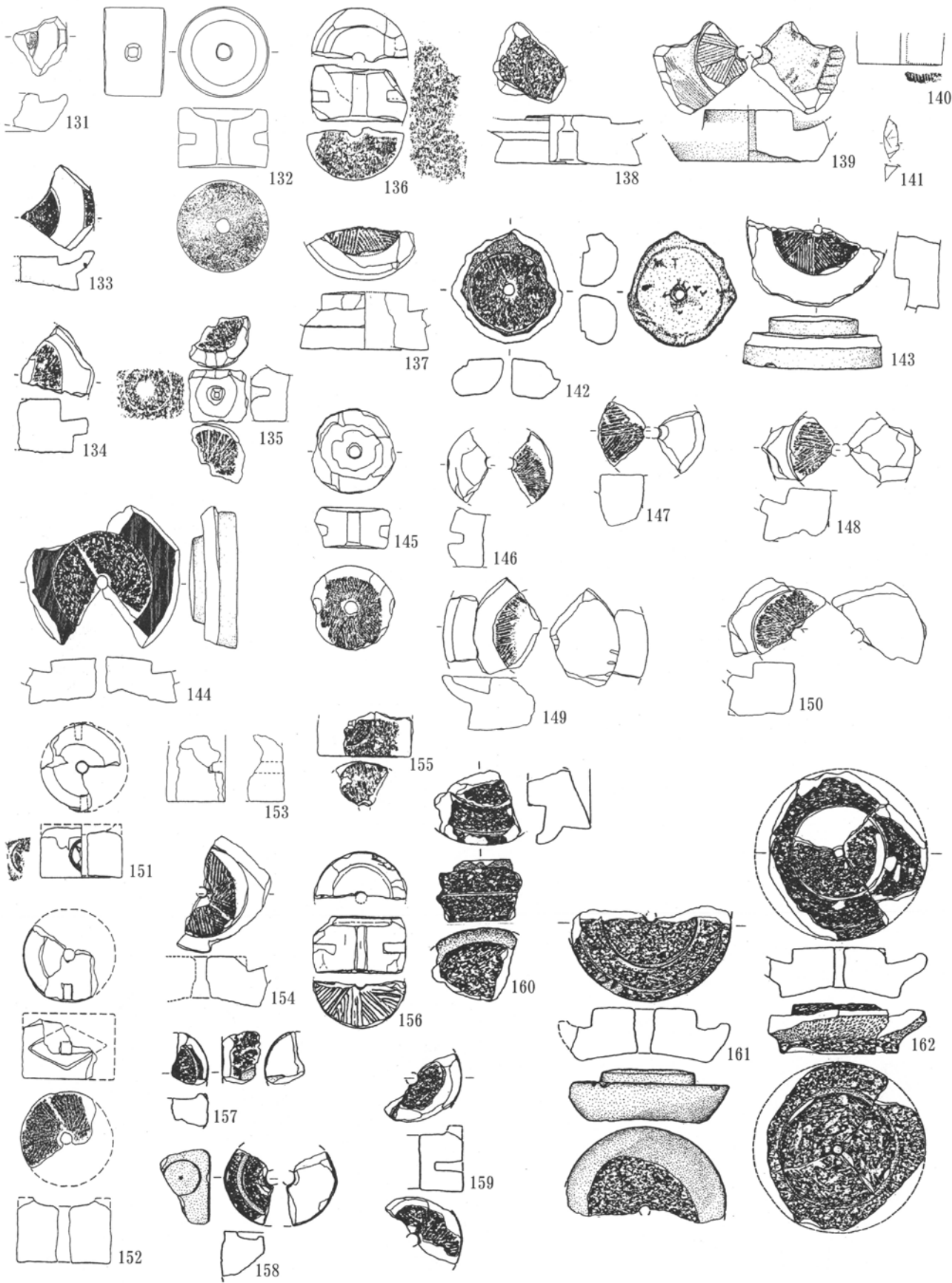
第4図 群馬県内出土茶臼(1)



第5図 群馬県内出土茶臼(2)



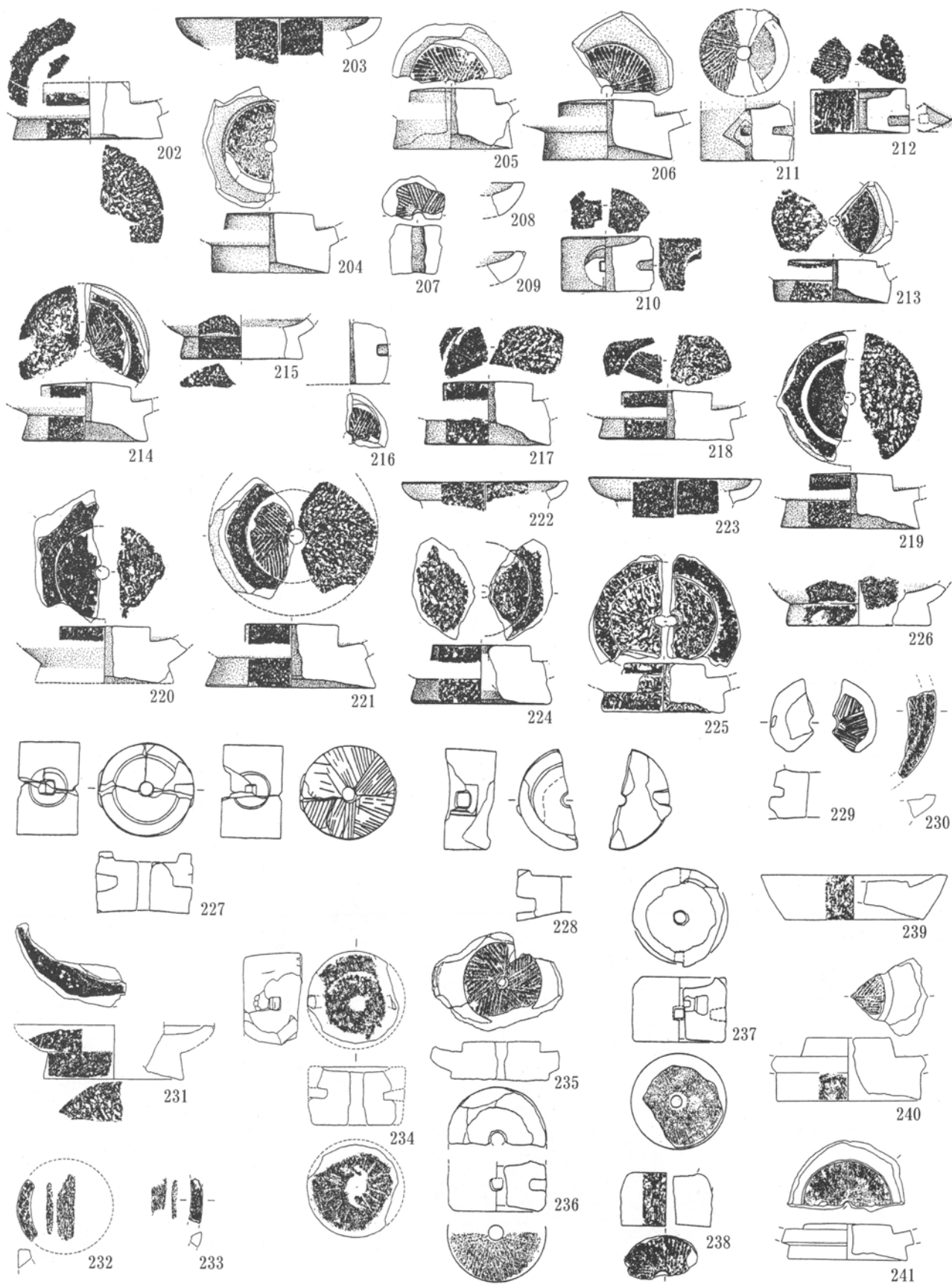
第6図 群馬県内出土茶臼(3)



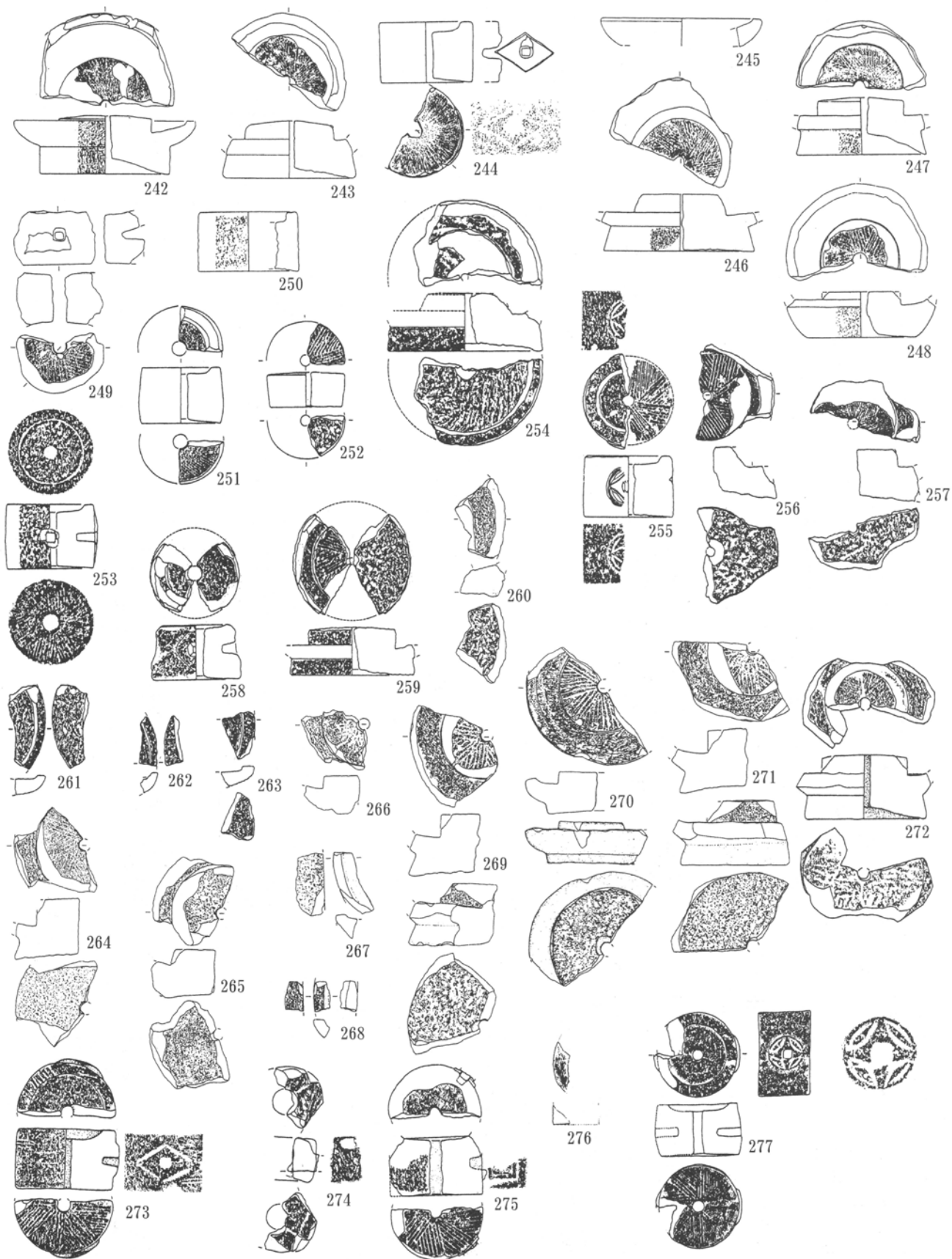
第7図 群馬県内出土茶臼(4)



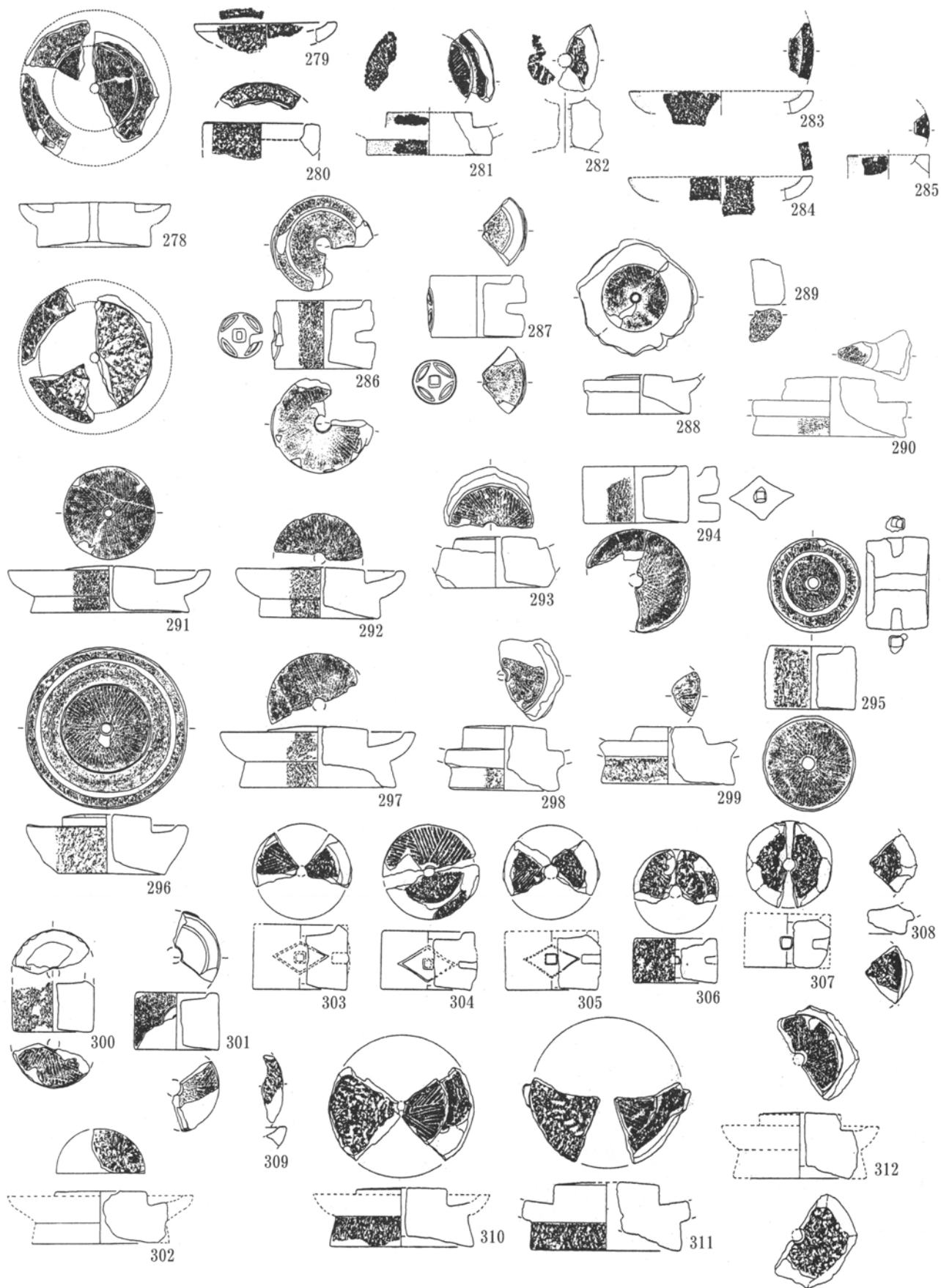
第8図 群馬県内出土茶臼(5)



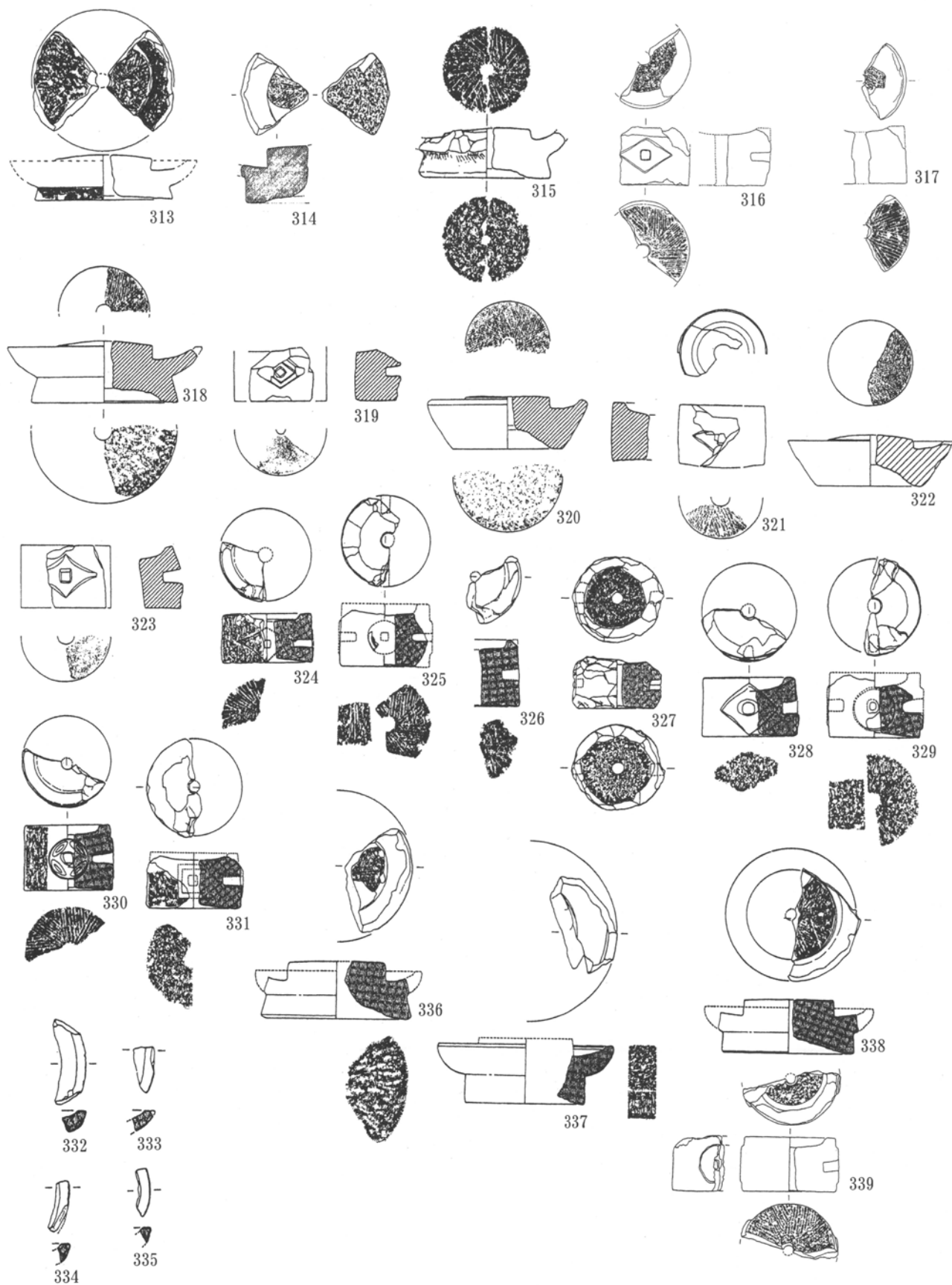
第9図 群馬県内出土茶臼(6)



第10図 群馬県内出土茶臼(7)



第11図 群馬県内出土茶臼(8)



第12図 群馬県内出土茶臼(9)

表5 群馬県内出土茶臼一覽(1)

遺跡名	種類	遺跡の性格	出土遺構	遺跡の年代	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	台座模様	石材	分画	文献
1 楽寺	上	寺院	1号井戸+1号基壇	15世紀初頭以前	18.0										菊	斑れい岩	8	1
2	下	"	1号井戸	"	18.0										二重方形	斑れい岩	8	1
3	上	"	15C後半以前	"												安山岩		1
4	下	"	"	"												多孔質安山岩		1
5	下	"	"	"												多孔質安山岩	8	1
6	下	"	"	"												多孔質安山岩	8	1
7 稲荷森	上	寺院周堀?	2号溝	15C後~17C代												安山岩	8	2
8	受皿	"	"	"												安山岩	10	3
9 同道	下	館	2号井戸	15C後~16C前	19.3							約40.0				安山岩	3	
10	下	"	"	"								約31.0					3	
11	上	"	"	"	19.4				0.05+								3	
12 浜町屋敷内C地点	上	館?集落?	25号井戸	"	(20.2)	2.1+			0.3		2.9矩形				菱	安山岩	6	4
13	上	"	38号井戸	"	(17.9)	13.1	1.9	2.0	0.3		2.0矩形				円	安山岩	8	4
14	上	"	40号井戸	"	(20.3)	13.1	2.15	2.0	0.3		3.0矩形				二重方形	安山岩	8	4
15	上	"	246号竪穴(土坑)	"	(18.6)	10.5	1.85	1.8	0.5		3.0矩形				なし	安山岩	8	4
16	上	"	3号溝B区	"	(21.6)	14.6	1.5	2.0	0.2		2.4矩形				二重方形	安山岩	4	
17	上	"	3号溝B区	"	20.0	11.1	2.4	2.2	0.2		2.3矩形				菱	安山岩	8	4
18	上	"	"	"	(20.0)	11.7	1.4		1.0		1.6隅矩				菱	安山岩	8	4
19	上	"	7号溝	"	(19.0)	12.3	1.4	2.2	0.5		2.8矩形				二重菱	安山岩	8	4
20	上	"	"	"	(20.2)	9.9+											8	4
21	下	"	22号井戸	"	18.3	11.7			0.7	2.5		34.0				安山岩	8	4
22	下	"	40号井戸	"	(20.1)	103+			0.5							安山岩	4	
23	下	"	"	"	(22.9)	11.5+			0.5							安山岩	4	
24	下	"	41号井戸	"	(20.0)	11.5			0.3	2.0						安山岩	8	4
25	下	"	3号溝	"	(16.2)	8.0			0.5	2.0						安山岩	8	4
26	下	"	7号溝	"	(18.6)	13.2			0.3							安山岩	4	
27	下	"	24号井戸	"	(20.0)	11.5+				2.0						安山岩	8	4
28	上	"	52号井戸	"			2.4	1.4								安山岩	4	
29	上	"	7号溝	"			2.8	2.0								安山岩	4	
30	上	"	8号溝	"			3.8									安山岩	4	
31	受皿	"	43号井戸	"								(26.8)					4	
32	受皿	"	45号井戸	"								(40.4)				安山岩	4	
33	受皿	"	3号溝	"		10.7+										花藏岩	4	
34	下	"	8号溝	"								(38.4)				安山岩	4	
35	受皿	"	3号溝	"								(27.2)				安山岩	4	
36	受皿	"	"	"								(40.8)				安山岩	4	
37	受皿	"	"	"												安山岩	4	
38	受皿	"	"	"								(41.6)				安山岩	4	
39	受皿	"	7号溝	"								(32.0)				安山岩	4	
40	受皿	"	8号溝	"								(30.8)				安山岩	4	
41	受皿	"	"	"								(39.2)				安山岩	4	
42	受皿	"	10号溝	"								(39.2)				安山岩	4	
43	受皿	"	15号溝	"								(35.4)				安山岩	4	
44	下	"	表探	"		10.3+										安山岩	8	5
45 北新波の誓址	下	碧	5トレンチ1号井戸	16C	19.5										二重菱	安山岩	8	5
46	上	"	"	"											菱	安山岩	8	5
47 金山城	上	城	井戸沢段上遺構表探															6
48 大友館址	上	館	K-12掘立	15C~16C	17.2	13.2	1.3	2.5		2.5	2.0			3.7		安山岩		7
49	上	"	遺構外		18.5	12.0	1.3	3.0	3.2	2.0	2.4			3.6		安山岩		7
50	下	"	遺構外		21.2	12.0			0.8	3.2			32.4			安山岩		7
51	下	"	遺構外		22.0	16.8			1.5	4.0			(28.8)			安山岩		7

表6 群馬県内出土茶臼一覧(2)

表6	群馬県内出土土器の一覧(2)	遺跡名	種類	遺跡の性格	出土遺構	遺跡の年代	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	台座模様	石材	分画	文献
52	善上		受皿		E-2 竪穴状遺構									45.0			安山岩		7	
53			上		〃		(24.5)		1.7	2.7			2.9			2.7	三重菱形	安山岩	7	
54	宿大類町村西		受皿	城	41号住居址									(46.4)			安山岩		8	
55			受皿	〃	2区1トレンチ表探									(40.3)			安山岩		8	
56			受皿	〃	2区4トレンチ2号井戸									(31.1)			安山岩		8	
57			受皿	〃	2区5トレンチ2号井戸									(34.6)			安山岩		8	
58			受皿	〃	不明														8	
59	宿大類町村西		上	〃	2区表探		(19.6)	12.5				2.3					二重方形	粗粒安山岩	55	
60			下	〃	14堀内		(15.7)	9.2						34.6			粗粒安山岩		55	
61			下	〃	1区1トレンチ2号井戸		18.7	11.4			0.6	2.4					粗粒安山岩		7	
62			下	〃	15堀内		(21.6)	10.4			0.3	(2.8)					粗粒安山岩		55	
63	下東西		下	寺院付施設	SD-118溝	15C	(19.0)										粗粒輝石安山岩		9	
64			上	〃	〃	〃	18.6	13.9	1.2	2.3	0.25	3.0	2.2				二重方形	粗粒輝石安山岩	9	
65			上	〃	〃	〃	20.4	14.6	1.4	2.5	0.2	3.1	1.8/2.2				あり	粗粒輝石安山岩	9	
66			上	〃	SE-07井戸	15C～16C	19.2	12.3	1.4	2.3	0.5	3.8					菱形	粗粒輝石安山岩	9	
67			上	〃	SJ-154住居	9C	(19.0)										粗粒輝石安山岩		9	
68			上	〃	SD-12溝	14～16	(19.6)	11	1.1	3.0	0.6	2.0	2.6				円形	粗粒輝石安山岩	9	
69			下	〃	SE-33井戸	15C後											粗粒輝石安山岩		9	
70			下	〃	SD-118溝	15C代											粗粒輝石安山岩		9	
71			受皿	〃	〃	〃								(38.0)			粗粒輝石安山岩		9	
72			受皿	〃	〃	〃								(38.0)			粗粒輝石安山岩		9	
73			下	〃	〃	〃	(19.5)				1.2	1.5					粗粒輝石安山岩		9	
74			受皿	〃	SE-45井戸	14C以降											粗粒輝石安山岩		9	
75			受皿	〃	SE-06井戸	15C後以降											粗粒輝石安山岩		9	
76			受皿	〃	SD-23溝	14C～16C											粗粒輝石安山岩		9	
77			受皿	〃	93G遺構外												粗粒輝石安山岩		9	
78	小塚		上	屋敷?	1号井戸+19号掘立	13C～15C	(18.0)	13.7						(35.0)			菱形	砂岩	10	
79			下	〃	1号井戸	〃								(33.0)	(23.0)		溶岩		10	
80			下	〃	単ピット	〃													11	
81	板鼻城		下	城	K-1号虎口石積み														12	
82	長根宿		下		TP-01	15C～19C											菱形	粗粒輝石安山岩	8	
83	上野国分寺・尼寺中間地域(2)		上	館	F区1号溝状遺構	14C後～16C前	(19.8)							(39.3)			粗粒輝石安山岩		13	
84			受皿	〃	〃	〃								(31.7)			粗粒輝石安山岩		13	
85			受皿	〃	〃	〃								(33.2)	(21.3)		粗粒輝石安山岩		13	
86			受皿	〃	F区2号井戸	16C前											粗粒輝石安山岩		13	
87			下	〃	F区3号井戸	15C前											粗粒輝石安山岩		13	
88			下	〃	G区20号溝状遺構	15C19C		5.4						(34.6)			粗粒輝石安山岩	8	13	
89			受皿	〃	H区11号溝状遺構	14C後～現代								(36.0)			粗粒輝石安山岩		13	
90			受皿	〃	遺構外												粗粒輝石安山岩		13	
91	古城		上	〃	II区D-10号土坑	14C～15C	(20.5)	11.5+									あり	安山岩	8	
92			下	〃	表探														14	
93	保渡田・荒神前		下	〃	A区3号井戸		(14.7)	11.5				2.4					安山岩		15	
94			下	〃	E区1号溝			7.5+						(33.4)			安山岩		15	
95	元総社明神VI		下	〃	W-7号溝	15C16C													16	
96	田端		下	寺院?館?	寺東地区遺構外												粗粒安山岩		17	
97			上	〃	寺東地区5号溝												あり	粗粒安山岩	60	
98	上榎木光仙房		上		V区1号溝	近世?	18.2	9.6			0.3	2.8	2.7隅方	(37.8)			粗粒輝石安山岩	8	18	
99	上榎木寺町田		受皿	屋敷	1号井戸	14C後～15C末											粗粒輝石安山岩		19	
100			上	〃	9号井戸	近世	(23.7)						2.8/3.0				菱形	粗粒輝石安山岩	19	
101	下佐野		上	館	I地区C区1号館(内郭堀)		(20.0)	12.1+									七宝文	粗粒輝石安山岩	57	

表7 群馬県内出土茶臼一覽(3)

遺跡名	種類	遺跡の性格	出土遺構	遺跡の年代	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	台座模様	石材	分画	文献
102	上館		I地区C区1号館(内郭堀)		(22.0)	14.1										粗粒安山岩		20
103	下館		"			10.5						(36.0)				粗粒安山岩		20
104	有馬I		井戸			9.6							25.6				8	21
105	上		"		21.0	13.5									円形	粗粒安山岩		21
106	上		"			11.0+										安山岩		22
107	受皿館		1号溝	13C~15C												安山岩		22
108	下館		"													安山岩		22
109	坂詰(下田篠5号古墳)		墳丘上													多孔質安山岩		23
110	元総社明神VII		I-1井戸									(36.0)				粗粒安山岩		24
111	芳賀東部団地III															安山岩		25
112	受皿															安山岩		25
113	上				(20.0)	11.8	1.7	2.5		2.3	2.2				円形	安山岩	8	25
114	上				(20.3)	12.0+			2.3	(2.3)					あり?	安山岩	6	25
115	下					12.7			2.8				25.8			安山岩	8	25
116	下					6.8+										安山岩		25
117	芳賀東部団地III					14.0			0.4	4.0		34.6				安山岩	8	25
118	下館		VI号溝	16C												粗粒安山岩		26
119	上		VI5号溝	"				3.5							3.3円形	粗粒安山岩		26
120	上		"	"				2.1		2.9	2.0				3.3円形	粗粒安山岩		26
121	下		"	"						2.6						粗粒安山岩		26
122	上		VI7号溝		10.7			2.4							3.8菱形	粗粒安山岩		26
123	上		VI8号溝							2.7						粗粒安山岩		26
124	上		VI1号溝					2.5		(2.1)					3.0円形	粗粒安山岩	10	26
125	下		"							(2.0)						粗粒安山岩		26
126	上		IV2号溝					2.7								粗粒安山岩		26
127	下		"													粗粒安山岩		26
128	下		IV5号溝							(2.4)			(18.0)			粗粒安山岩	8	26
129	下		V4号溝													粗粒安山岩		26
130	下		V14号井戸							2.5/4.4		33.0+				粗粒安山岩	8	26
131	下		"									(32.8)				粗粒安山岩		26
132	上		遺構外					2.4		3.4/3.3					なし	粗粒安山岩		26
133	下		3トレイ・5井戸			8.1										粗粒安山岩		27
134	下		3トレイ・2井戸			11.2										粗粒安山岩		27
135	上		F5号井戸			11.0+									円形	安山岩		28
136	上		E165溝	14C~15C	21.0	12.0	1.5	2~3.0		3.0					なし	安山岩		28
137	下		3・4区1号福井	17C~19C												粗粒安山岩		29
138	下		"	"												粗粒安山岩		29
139	下		SK3墓	15C前以降												粗粒安山岩	8	30
140	上		SD18溝	15C前	(18.0)											砂岩		30
141	上		阿弥陀地区															31
142	下		1号堀															32
143	下		8号配石遺構	15C~16C	(20.0)	9.9							(30.0)			砂岩	8	33
144	下		5号井戸		22.0	10.4			2.5			33.6+				砂岩	8	33
145	上		1号池	15C~16C?												粗粒安山岩		34
146	上		"	"												粗粒安山岩		34
147	下		"	"												粗粒安山岩		34
148	下		"	"												粗粒安山岩		34
149	下		"	"												粗粒安山岩		34
150	下		"	"												粗粒安山岩		34
151	上		5区110号溝												七宝文?	粗粒安山岩		34
152	上		5区8号井戸												菱形	粗粒安山岩		35
																粗粒安山岩		36

表8 群馬県内出土茶臼一覧(4)

遺跡名	種類	遺跡の性格	出土遺構	遺跡の年代	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	台座模様	石材	分画	文献
153 二之宮宮下東	上	館	27号溝															36
154	下	〃	3号井戸														6	36
155	上	〃	21号井戸															36
156 元総社明神XⅡ	上	〃	βトレンチw-1溝		19.6	11.9									七宝文		8	37
157 小島田八日市	上	製作地	39号井戸			7.0+	1.0	1.0	0.5						円形	粗粒安山岩		38
158	上	〃	31号井戸			9.5+	1.4	3.2		(3.0)						粗粒安山岩		38
159	上	〃	15号溝			12.5+		4.0		(3.5)	2.4					粗粒安山岩		38
160	下	〃	表探			13.2										粗粒安山岩		38
161	下	〃	34号井戸		21.6	10.4						36.0	27.2			粗粒安山岩		38
162	下	〃	15号溝		19.1	10.5						(36.2)	19.6			粗粒安山岩		38
163	下	〃	〃		(20.8)	13.3						39.0	25.7			粗粒安山岩		38
164	下	〃	31号井戸		12.8							29.0				粗粒安山岩		38
165 東平井宮正前	下	〃	1号井戸	15C後														39
166	上	〃	〃	〃											円形	粗粒安山岩		39
167 西浦北	受皿	〃	w-16溝															40
168	下	〃	〃		(20.8)	14.5						(33.3)				粗粒安山岩		41
169 高崎城三ノ丸	受皿	城	158-SE 1井戸													粗粒安山岩		41
170	受皿	〃	158-SK185土坑													粗粒安山岩		41
171	受皿	〃	158-SK230土坑													ひん岩		41
172	下	〃	158-SE89井戸													粗粒安山岩		41
173	下	〃	158-SK236土坑													粗粒安山岩		41
174	下	〃	158-SE89井戸													粗粒安山岩		41
175 高崎城三ノ丸	下	〃	185-SD67溝			12.3						32.0+				粗粒安山岩		47
176	下	〃	185-SE22井戸			13.6						34.2+				粗粒安山岩		41
177	下	〃	185-SE8井戸			13.5						34.9+				粗粒安山岩		41
178 土井山	上	〃	I・1号井戸	15C?												安山岩		42
179	下	〃	10トレンチA													安山岩		42
180 猿川	下	〃	8・9トレンチ		(20.2)											凝灰岩		42
181 今井道上・道下	上	〃	10号井戸		18.0	9.3						(36.0)						43
182 上久保	受皿	〃	2 A・23・25グリッド									(32.6)						44
183	下	〃	表探		17.7	11.5												44
184	上	〃	2 D・23グリッド		(22.8)	13.0										安山岩		44
185	下	〃	2 J・24グリッド		(21.2)	10.3										安山岩		44
186	上	〃	2 F・16グリッド		(17.0)	11.0										安山岩		44
187 上栗須寺前Ⅲ区	上	〃	4号溝		(20.0)	11.8+									円形	粗粒安山岩		45
188	上	〃	601号土坑		20.5	10.2									菱形	粗粒安山岩	6	45
189	上	〃	2000号土坑		(20.0)	11.5									方	粗粒安山岩	8	45
190	上	〃	1914号土坑			10.8										粗粒安山岩	8	45
191	下	〃	15・57号溝			10.7						(28.0)	(27.0)		なし	粗粒安山岩		45
192 野中天神	上	屋敷	13号溝	15C		13.6												46
193	下	〃	2号井戸	〃		12.4										粗粒安山岩		46
194 矢島館址	上	館	3溝南西													粗粒安山岩		48
195	上	〃	3溝															48
196	下	〃	土坑70													砂岩質		48
197	下	〃	3溝南															48
198	受皿	〃	3溝東													粗粒安山岩		48
199	受皿	〃	3溝南西													粗粒安山岩		48
200 浜川芦田貝戸Ⅲ	下	〃	2区南SD78													安山岩		49
201 御布呂Ⅰ	下	〃	道路区Ⅰ土坑24													安山岩		50
202	下	〃	道路区													安山岩		50
203	受皿	〃	道路区													安山岩		50

表9 群馬県内出土茶臼一覽(5)

遺跡名	種類	遺跡の性格	出土遺構	遺跡の年代	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	台座模様	石材	分画	文献
204 浜川北	下館		SE・2井戸	15C～16C	18.0	12.4			0.2							安山岩		51
205	下		SE・6井戸		19.4	12.6			0.6							安山岩	6	51
206	下		〃													安山岩		51
207 熊野堂III	上館?		15土坑															52
208	受皿		2竪穴															52
209	受皿		5・6溝															52
210 諏訪	上	屋敷	A 6井戸												円形	安山岩		53
211	上		外堀・東堀												二重菱形			53
212	上		内堀・北堀												菱形	多孔質黒色安山岩		53
213	下		中央掘トレンチ南端												菱	粗粒安山岩		53
214	下		A1-16内堀・中央堀													粗粒安山岩		53
215	下		A 6井戸													硬質安山岩		53
216 元島名	上城															粗粒安山岩		54
217	下		R II 4土坑													粗粒安山岩		54
218	下		R II 9溝													粗粒安山岩		54
219	下															粗粒安山岩		54
220	下		R I													粗粒安山岩		54
221	下															粗粒安山岩		54
222	受皿		R II													粗粒安山岩		54
223	受皿		R II 5号溝													粗粒安山岩	変則目	54
224 下村北館址	下館		SD I 溝															54
225 倉賀野万福寺	下		1号井戸															56
226 分布調査八幡地区	下		表探													砂岩		59
227 神保桶松	上城		3号堀	15C～16C	20.0	11.8									円形	粗粒輝石安山岩		61
228	上		7号堀	〃	21.2	10.0									方形	粗粒輝石安山岩		62
229	上		2号堀	〃	(18.0)	10.2+										粗粒輝石安山岩	8	62
230 下小島神戸	受皿		1号竪穴遺構	13C～15C?								(19.5)				粗粒安山岩		63
231	下		ピット	〃								(42.0)	(30.0)			粗粒安山岩		63
232	上		集探		(20.0)											粗粒安山岩		63
233 下小島神戸	受皿		表探													粗粒安山岩		63
234	上		民家竪地・盛土中		21.0	12.0	4.0	3.0		3.0/4.8				4.4/4.2	連続状	粗粒安山岩	放射目	63
235 八木原久保	下水田		洪水砂層中	16C～17C	17.0	8.1				3.0	2.0		21.2			粗粒安山岩	8	64
236 中屋敷・中村田	上		遺構外		20.5	10.7+				2.3	2.8					粗粒輝石安山岩		65
237	上		〃		20.5	13.8										粗粒輝石安山岩		65
238 前城 I	上城		1次1号堀		(19.0)	11.2+										粗粒安山岩		66
239	下		〃			9.4+						(39.4)	(29.0)			粗粒安山岩		66
240	下		1次2号堀		(17.4)	12.9						(30.0)	(30.0)			粗粒安山岩		66
241	下		〃			7.5						24.8				粗粒安山岩		66
242	下		〃			12.6						39.2	28			粗粒安山岩		66
243	下		2次1号溝			12.4						27.4				粗粒安山岩		66
244	上		3次1号堀		20.1	12.8									菱	粗粒安山岩	放射目?	66
245	受皿		〃									(34.0)				粗粒安山岩		66
246	下		〃			12.2						33.2	32			粗粒安山岩		66
247	下		3次2号堀													粗粒安山岩		66
248	下		〃									(22.6)				粗粒安山岩		66
249	上		3次1号井戸			9.7										粗粒安山岩		66
250	上		3次10号井戸		(20.4)	12.6										粗粒安山岩		66
251 上仲居西栗師II	上		4号溝		(18.2)	12.1										粗粒安山岩		66
252	下		表探		(16.6)	7.4										安山岩		67
253 堀越中道	上		1号地下式土坑		18.7	13.7	1.7	2.0	0.5		2.2			4.5	なし	安山岩	8	67
254 浜川高田	下館関連		15区7号井戸	14C～16C後		12.8										粗粒輝石安山岩		68
																粗粒輝石安山岩		69

表10 群馬県内出土茶臼一覽(6)

遺跡名	種類	遺跡の性格	出土遺構	遺跡の年代	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	台座模様	石材	分画	文献
255	上	〃	15区8号井戸	〃	(19.3)	13.2									七宝文	粗粒輝石安山岩	8	69
256	下	〃	〃	〃		11.5										砂岩	8	69
257	下	〃	〃	〃		(11.4)										粗粒輝石安山岩	8	69
258	上	〃	15区8号溝	〃	(19.7)	11.8									菱形	粗粒輝石安山岩	69	69
259	下	〃	〃	〃		10.4										粗粒輝石安山岩	8	69
260	下	〃	〃	〃		7.0										粗粒輝石安山岩	69	69
261	受皿	〃	15区10号溝	〃												粗粒輝石安山岩	69	69
262	受皿	〃	26区4号溝	〃												粗粒輝石安山岩	69	69
263	受皿	〃	26区4号溝	〃												粗粒輝石安山岩	69	69
264	下	館	7区1号溝	15C～16C	(10.3)	13.2							(30.0)			粗粒輝石安山岩	70	70
265	下	〃	〃	〃	(19.6)	10.6										粗粒輝石安山岩	70	70
266	下	〃	〃	〃	(18.0)							(39.6)				粗粒輝石安山岩	70	70
267	受皿	〃	〃	〃								36.0				粗粒輝石安山岩	70	70
268	受皿	〃	7区13号溝	〃									(33.0)			粗粒輝石安山岩	8	70
269	下	〃	7区11号井戸	〃	(19.0)	13.7						(36.0)	25.2			粗粒輝石安山岩	8	70
270	下	〃	7区22号土坑	〃	20.2	9.1							(31.4)			粗粒輝石安山岩	8	70
271	下	〃	7区表探	〃	(19.6)	14.1							(29.0)			粗粒輝石安山岩	71	71
272	下	集落	I～1号井戸	14C～16C後		13.8			(3.7)						菱形	粗粒安山岩	8	71
273	上	〃	〃	〃	(22.3)	12.9			(3.0)						菱形	粗粒安山岩	71	71
274	下	〃	〃	〃					(5.5)						二重方形	粗粒安山岩	71	71
275	上	鍛冶工房？	堅穴遺構	15C～16C	20.0	12.7										浅間軽石	8	72
276	上	館	w-1号溝	16C？												安山岩	73	73
277	上	館	土橋敷設礫中	中世	18.1	11.5			0.3	1.9	2.2方			5.3	七宝文	粗粒安山岩	8	74
278	下	〃	〃	〃	(17.8)	9.7				1.8		(33.4)	(24.8)			安山岩	74	74
279	受皿	館・集落	1区1号堀	14C後～16C前								(31.0)				粗粒輝石安山岩	75	75
280	上	〃	1区10号井戸	〃	(20.0)	12.2+			0.8	3.6	2.6				円形？	粗粒輝石安山岩	75	75
281	下	館・屋敷	2区57号溝状遺構	〃	(19.0)	9.2							(27.0)			粗粒輝石安山岩	76	76
282	上	〃	3区1号井戸	15C												粗粒輝石安山岩	76	76
283	受皿	〃	〃	〃								(40.0)				粗粒輝石安山岩	76	76
284	受皿	〃	〃	〃								(41.0)				粗粒輝石安山岩	76	76
285	上	〃	6区12号井戸	〃	(18.0)											粗粒安山岩	76	76
286	上	城	3次3号溝	〃	21.8	14.8								七宝文	粗粒安山岩	8	77	
287	上	〃	3次3号堀	〃	19.2	13.3								七宝文	粗粒安山岩	77	77	
288	下	〃	4次6号井戸	〃		12.5						33				粗粒安山岩	6	77
289	上	〃	4次17号井戸	〃		10.0+										粗粒安山岩	77	77
290	下	〃	4次3号集石	〃		12.8							32.4			粗粒安山岩	77	77
291	下	城	5次2号井戸	〃		9.9						44	34.6			粗粒輝石安山岩	8	77
292	下	〃	5次29号井戸	〃		11.0						36.5	26.4			粗粒安山岩	77	77
293	下	〃	5次38号井戸	〃		10.8							(22.6)			粗粒安山岩	8	77
294	上	〃	5次39号井戸	〃	(22.0)	12.2									菱形	粗粒安山岩	8	77
295	上	〃	5次40号井戸	〃	20.0	13.5									菱形	粗粒安山岩	8	77
296	下	〃	〃	〃		12.7						35	23		なし	粗粒安山岩	8	77
297	下	〃	5次43号井戸	〃		13.2						(42.2)	(33.8)			粗粒安山岩	8	77
298	下	〃	5次44号井戸	〃		14.0							23.5			粗粒安山岩	77	77
299	下	〃	5次堀乱	〃		12.3							(28.4)			粗粒安山岩	77	77
300	上	〃	5次表探	〃	(17.4)	(11.1)										粗粒安山岩	77	77
301	上	〃	〃	〃	(18.0)	(12.4)									円形	粗粒安山岩	77	77
302	下	2号トレンチ一括	2号トレンチ一括	〃	(19.7)	11.2										安山岩	78	78
303	上	館	6-3トレンチ12井戸	〃	(20.0)	12.5+					2.3				菱形	粗粒安山岩	78	78
304	上	〃	6-2トレンチM1溝	〃	(20.0)	12.5		2.3			(2.3)				菱形	粗粒安山岩	8	78
305	上	〃	元井出館14井戸	〃	(20.0)	13.5					(2.4)				菱形	粗粒安山岩	78	78

表11 群馬県内出土茶臼一覧(7)

遺跡名	種類	遺跡の性格	出土遺構	遺跡の年代	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	台座模様	石 材	分画	文献
306	上	城	元井出館北西堀		(18.3)	9.5		2.0			(1.8)				なし	安山岩		78
307	上	〃	〃		(18.3)	11.5					2.8					粗粒安山岩		78
308	下	〃	8-1トレンチ12井戸													粗粒安山岩		78
309	受皿	〃	8-1トレンチD8土坑													粗粒安山岩		78
310	下	〃	元井出館西中央堀		19.5	12.5										粗粒安山岩		78
311	下	〃	6-2トレンチ11井戸		(22.2)	14.5										粗粒安山岩		78
312	下	〃	3区I1井戸		(17.8)	14.0				3.3						粗粒安山岩		78
313	下	〃	元井出館西中央堀		(20.5)	9.5				(3.3)						粗粒安山岩		78
314	下	〃	池西側下段石垣覆土中													安山岩		79
315	下	〃	D-5号土坑			15.0				3.0			26.8			粗粒安山岩	7	80
316	上	〃	19号土坑(地下式坑)		(20.0)	12.1+				(2.8)	2.0			4.2	菱 形	粗粒安山岩	8	81
317	上	〃	〃		(19.4)	12.0+				(2.8)		42.4	31.8			粗粒安山岩	6	81
318	下	城	日の池二段目石敷			(13.2)										安山岩		82
319	上	〃	大手虎口北下段曲輪		19.5	10.0					2.0方				二重菱形			82
320	下	〃	大手虎口中央通路			11.0						33.6	23			砂岩	8	82
321	上	〃	大手虎口南下段曲輪		18.6	13.2									菱 形	安山岩		82
322	下	〃	〃			10.0						35	22			安山岩		82
323	上	〃	大手虎口東端土塁I		(18.7)	(13.5)					3.0/2.4				菱 形	砂岩		82
324	上	〃	3区堀底集石		(20.0)	10.6	1.2	2.4	1.0	3.1	1.7/1.3			.4	菱 形	輝石安山岩		83
325	上	〃	4区2号集石		(19.8)	12.0+			0.3	3.0	1.7/2.0			4.6/3.8	円 形	輝石安山岩	8	83
326	上	〃	4区		(20.0)	14.4	1.6	2.2	0.2	2.2	2.6方			(3.8)		多孔質輝石安山岩		83
327	上	〃	7区1号石横北		19.1	11.2+			0.4	2.5				2.3/3.1		輝石安山岩		83
328	上	〃	〃		(21.1)	12.8	2.0	2.9	0.4	(3.0)	3.7/4.6				3.2	菱 形	多孔質輝石安山岩	83
329	上	〃	〃		(20.2)	13.5+			1.0	3.1				4.7/3.0	円 形	多孔質輝石安山岩	83	
330	上	〃	8区4号井戸		(19.4)	14.1			0.6	(2.4)	2.7/3.0			4.7	七 宝 文	多孔質輝石安山岩	8	83
331	上	〃	9区		(21.0)	11.3+			0.8	2.8	2.0/2.1			4.0	二重方形	多孔質輝石安山岩		83
332	受皿	〃	3区1号集石													輝石安山岩		83
333	受皿	〃	5区堀底													多孔質輝石安山岩		83
334	受皿	〃	7区法面													輝石安山岩		83
335	受皿	〃	9区虎口						0.3							多孔質輝石安山岩		83
336	下	〃	4区2号集石		(21.4)	12.4						(36.0)	(30.3)			輝石安山岩		83
337	下	〃	8区			12.7+						(38.4)	(26.3)			多孔質輝石安山岩		83
338	下	〃	不明		(19.4)				0.1	(2.4)		(36.3)	(28.0)			多孔質輝石安山岩	8	83
339	上	館	8号井戸	中世後半	20.0	11.8			0.2	(2.)					円 形	粗粒安山岩		84

よる製作（生産）が窺われ、同様な製作遺跡が他にも存在することが予測される。牛伏砂岩を石材とした茶臼についても、同様である。こうした諸要素を考えあわせれば、需要と供給そして流通の問題へと展開していくことが見えてこようが、今後の検討に委ねたい。

台座文様でみると、七宝文が前橋市を中心とする県央部周辺からの出土がみられ、地域的な偏在の可能性も考えられる。

さらに、これらの年代は、全国的な傾向と矛盾せずに15・16世紀の遺跡からの出土が多く、県内最古の資料としては長楽寺遺跡例のように15世紀初頭以前とされる資料がある。この長楽寺遺跡例からすれば、15世紀初頭期頃の禅宗寺院において、抹茶法による喫茶が行われていたことが理解できる。

さて、従来の研究では、茶臼の出土頻度は少ない点も含めて、当時の喫茶が抹茶法のみでなかった可能性が指摘されているが（尾野 2002）、県内の出土量からは出土頻度が少ないとは言い難い。勿論、筆者も抹茶法以外の喫茶スタイルは想定できるように思う。

他にも、茶臼に関する課題はいくつかある。用途論の問題として、茶臼を火薬製造に使用したとする見解も存在する（三輪 1978、1999 他）。また、所謂「魂抜き」の行為として、茶臼や穀物臼を意図的に破壊するとの見解もある（三輪 1978 a、小池 2000 ほか）。いずれにせよ、考古学以外を含めた多くの問題が秘められている。今回の集成を軸に、今後も研究を進めていきたい。

文末ではあるが、本稿を草するにあたって大江正行、綿貫邦男、桜岡正信の諸氏には助言ならびに便宜を図って頂いた。また、小川卓也氏には図版作成など多くの面でお世話になった。記して、感謝申し上げたい。

（水谷）

註

- 1) この受け皿のことを「はんぎり」と呼ぶこともある。
- 2) 図1は図版出典文献83より引用し、一部改変した。
- 3) 羽田 聡 2002 「58重要文化財 金沢貞顕書状」『日本人と茶—その歴史・その美意識—』京都国立博物館
この書状の中に、拝領した茶葉を抹茶にしてもらうための依頼文があり、茶臼が高価であったことがわかる。
- 4) 尾野善裕 2002 「78驚竈跡出土陶器」『日本人と茶—その歴史・その美意識—』京都国立博物館
- 5) 志田 登 1996 「00石臼」『新編高崎市史資料編3』
高崎市内の様相の中で、穀物臼の臼面径について上臼は28～30cmが、下臼は30～32cmが多いとしている。
- 6) 製品に加工しやすい反面、使用に際しての摩耗は多かったと考えられる。先述したように、遺跡から出土する茶臼の多くは製作時点の高さを残していないと考えられる。
- 7) これらの台座文様の他に、「連珠状」とされる資料がある（第9図234）。実見したが、台座文様は存在するものの積極的に「連珠状」の装飾として判断できなかったことから、ここでは扱っていない。また、上臼臼面の軸穴部分に「ものくばり」状の痕跡が見られるなど、通常の花臼の理解ではとらえられない資料である。
- 8) 小島田八日市遺跡報告書の第156図19～22、PL60-5・6・9として

掲載されている。

図版出典文献

- 1) 大江正行 1978 「長楽寺遺跡—一世良田小学校改築工事に伴う発掘調査」 尾島町教育委員会
- 2) 井上 太・今井幹夫 1980 「稲荷森遺跡発掘調査報告書」 富岡市教育委員会
- 3) 石坂 茂・中沢 悟他 1983 「同道遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4) 飯田陽一・徳江秀夫他 1985 「浜町屋敷内遺跡C地点」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5) 桜井 衛・星野 太 1985 「北新波の砦址—古城（II）」 高崎市教育委員会
- 6) 山崎 一他 1986 「史跡金山城跡保存管理計画書」 太田市
- 7) 中村富夫・間庭 稔・三宅敦気 1986 「三峰神社裏・大友館址・善上遺跡」 月夜野町町教育委員会
- 8) 神戸聖語・茂田勝健他 1987 「宿大類町村西遺跡」 高崎市教育委員会
- 9) 津金沢吉茂・大江正行他 1987 「下東西遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 10) 井上 太 1987 「小塚・六反田・久保田遺跡発掘調査報告書」 富岡市教育委員会
- 11) 大工原豊 1987 「板鼻城遺跡」 安中市教育委員会
- 12) 茂木由行 1987 「西場脇・長根宿遺跡」 吉井町教育委員会
- 13) 木津博明・桜岡正信 1987 「上野国分僧寺・尼寺中間地域」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 14) 大工原豊・千田茂雄 1988 「古城遺跡」 安中市教育委員会
- 15) 若狭 徹・五十嵐至 1988 「保渡田・荒神前遺跡 皿掛遺跡」 群馬町教育委員会
- 16) 駒倉秀一・加部二生 1988 「元総社明神遺跡VI」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 17) 神保有史・西田健彦他 1988 「田端遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 18) 飯塚 誠・原 雅信他 1988 「上植木光仙房遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 19) 飯塚 誠他 1988 「書上吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木老町田遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 20) 秋池 武他 1989 「下佐野遺跡I地区・寺前地区(4)中世・近世編」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 21) 友廣哲也他 1989 「有馬遺跡I 奈良平安時代編・大久保B遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 22) 原 雅信 1989 「三室坊主林」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 23) 井上 太 1990 「新井・坂詰遺跡」 富岡市教育委員会
- 24) 前原 豊・井上敏夫 1990 「元総社明神遺跡VIII」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 25) 大西雅広・唐沢保之他 1990 「芳賀東部団地遺跡III—縄文・中近世編—」 前橋市教育委員会
- 26) 飯田陽一・大木紳一郎他 1991 「下淵名塚越遺跡」 群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団
- 27) 鈴木雅広・狩野吉弘 1992 「元総社明神遺跡X」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 28) 綿貫邦男 1992 「鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F区」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 29) 大西雅広・藤巻幸男他 1992 「二之宮千足遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 30) 関口 修・高井郁郎 1992 「上中居辻薬師II遺跡」 高崎市教育委員会
- 31) 小川卓也 1992 「市之関前田遺跡III」 宮城村教育委員会
- 32) 宮下昌文 1993 「上久屋地区遺跡群 下清水遺跡・馬場遺跡・橋場遺跡 十二反遺跡」 沼田市教育委員会
- 33) 新井 仁 1993 「内匠上之宿遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 34) 黒田 晃他 1993 「白井遺跡群—中世編—（白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡）」 群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 35) 藤巻幸男・岩崎泰一他 1993 「五日牛清水田遺跡」(古代・中近世編) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 36) 大西雅広・藤巻幸男他 1994 「二之宮宮下東遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 37) 新保一美 1994 「元総社明神XⅡ」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 38) 杉山秀宏他 1994 「小島田八日市遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 39) 石守 晃他 1994 「飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 40) 綿貫綾子・清水豊・木村芳昭 1994 「南部遺跡群」 群馬町教育委員会
- 41) 中村 茂他 1994 「高崎城三ノ丸遺跡」 高崎市教育委員会
- 42) 占郡正志・寺内敏郎 1995 「F14藤岡平地区遺跡群Ⅱ」 藤岡市教育委員会
- 43) 大木紳一郎他 1995 「今井道上・道下遺跡」 群馬県埋葬文化財調査事業団
- 44) 千田茂雄 1996 「北原遺跡・上久保遺跡」 安中市教育委員会
- 45) 石塚久則・坂井 隆・新倉明彦・他 1996 「上栗須寺前遺跡群Ⅲ3区(藤岡市上栗須寺前)」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 46) 坂口 一・大西雅広他 1996 「野中天神遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 47) 中村 茂 1996 「高崎城三ノ丸遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 48) 関口 修 1996 「矢島館址(矢島遺跡)」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 49) 志田 登 1996 「浜川芦田貝戸Ⅲ遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 50) 関口 修 1996 「御布呂遺跡(Ⅰ)」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 51) 高橋 淳 1996 「浜川北遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 52) 木津 博明 1996 「熊野堂遺跡Ⅲ地区」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 53) 中村 茂 1996 「諏訪遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 54) 五十嵐伸 1996 「元島名遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 55) 神戸聖語 1996 「宿大類町村西遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 56) 高橋 淳 1996 「下村北館址」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 57) 牧野裕美 1996 「下佐野遺跡Ⅰ地区・寺前地区」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 58) 関口 修 1996 「上仲居辻薬師Ⅱ遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 59) 関口 修 1996 「倉賀野満福寺Ⅱ遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 60) 綿貫邦男 1996 「田端遺跡」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 61) 大江正行他 1996 「(二)分布調査 3 八幡地区」[新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ] 高崎市史編さん委員会
- 62) 谷藤保彦 1997 「神保植松遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 63) 綿貫邦男 1997 「下小島神戸遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 64) 荒木勇次 1997 「八木原久保遺跡」 渋川市教育委員会
- 65) 岡本範之・小宮俊久 1997 「中屋敷・中村田遺跡」 新田町教育委員会・群馬県企業局
- 66) 片野雄介・桜岡正信他 1997 「前橋城遺跡Ⅰ」 群馬県教育委員会
- 67) 神戸聖語・長井正欣 1997 「上中居西薬師Ⅱ遺跡」 高崎市遺跡調査会
- 68) 山下歳信 1997 「堀越中道遺跡」 大胡町教育委員会
- 69) 桜井美枝・綿貫邦男他 1998 「浜川遺跡群」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 70) 小島敦子 1998 「荒砥上之坊Ⅳ」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 71) 志村 哲・長谷川一郎 1998 「F28 a 東平井中道B遺跡・F28 b 薬師遺跡」 藤岡市教育委員会
- 72) 武部喜充・清水広晃他 1998 「奴郷Ⅱ遺跡」 万場町教育委員会
- 73) 新保一美 1998 「小暮北受地遺跡」 富士見村遺跡調査会
- 74) 矢島博文他 1998 「群馬県前橋市公田東遺跡」 警察宿舍遺跡調査会
- 75) 神保佑史・飯森康広他 1999 「下植木老町田遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 76) 木津博明・大江正行他 1999 「東長岡戸井口遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 77) 藤巻幸男他 1999 「前橋城遺跡Ⅱ」 群馬県教育委員会
- 78) 清水 豊 1999 「井手地区遺跡群」 群馬町教育委員会
- 79) 中村渉・金沢誠他 1999 「金山城跡・月ノ池」 太田市教育委員会
- 80) 井野誠一・長谷川一郎他 1999 「群馬県前橋市総社閑泉明神北遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 81) 齊木一敏・長井正欣 2000 「五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 82) 中村 渉・金沢 誠他 2001 「史跡金山城跡環境整備報告書」 発掘調査編 太田市教育委員会
- 83) 山下歳信 2001 「〈群馬県指定史跡 大胡城跡〉本丸北大堀切り跡」 大胡町教育委員会
- 84) 坂爪久純・野平伸一 2002 「下刈名・高田遺跡」 境町教育委員会

引用・参考文献

- 江崎 武 1985 「中世地下式墳の研究」[古代探叢]Ⅱ 早稲田大学出版部
- 岡本健児 1985 「高知県吸江寺の石茶臼(南北朝時代)」[高知県文化財調査報告書] 第27集
- 尾野善裕 2002 「日本人と茶の1200年」[日本人と茶-その歴史・その美意識] 京都国立博物館
- 川又清明 1995 「茨城県内石臼集成」[茨城県考古学協会誌] 第7号 茨城県考古学協会
- 北村誠一・段上達雄・富田清子 1986 「佐渡の石臼」 未来社
- 桐山秀穂 1996 「日本における茶臼の研究」[古代学研究所研究紀要] 第6輯 古代学協会
- 久々忠義・越前慶祐他 1999 「下村加茂遺跡発掘調査報告書」 下村教育委員会
- 小池 聡 2000 「石臼は何故壊れるかー神奈川県下近世遺跡出土石臼からの考察ー」[竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集]
- 国分政子 1997 「中世後期近江の石臼と石工についてー中主町吉地大寺遺跡出土石臼の検討よりー」[滋賀考古] 第18号 滋賀考古学研究会
- 関 義則 1992 「喫茶の考古学ー茶の湯再発見ー」 埼玉県立博物館
- 北陸中世考古学研究会編 1999 「中世北陸の石文化Ⅰ」 第12回北陸中世考古学研究会資料集
- 堀田孝博 1998 「神奈川県下出土茶臼について」[下鶴間城山(伝山中修理助貞信壘蹟・大和市Na181遺跡)] 大和市教育委員会
- 宮瀧交二 1991 「堂山下遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 三輪茂雄 1978 a 「臼」 法政大学出版局
- 三輪茂雄 1978 b 「石臼探訪」 産業技術センター
- 三輪茂雄 1994 「増補 石臼の謎」 クオリ
- 三輪茂雄 1999 「粉と臼」 大巧社
- 勝守すみ 1973・1974 「未刊史料「永禄日記」について」[群馬大学教養学部紀要(人文・社会科学編)] 23・24巻
- 千々和到 1978 「長楽寺永禄日記」[群馬県史資料編5 中世Ⅰ]
- 小野瀬和男 1987 「長楽寺における勤行についてー永禄日記を題材としてー」[群馬県立歴史博物館調査報告書] 第4号
- 山本世紀 1993 「長楽寺と臨済宗の展開」[尾島町誌 通史編上巻]
- 唐沢定一 1997 「永禄八年の新田地方ー長楽寺永禄日記から見た由良成繁の分国統治ー」[太田市史通史編 中世]